

## オーマ・シャルロットの真珠

### 1 オーマの話

「おい執事、うちのあの、三十年だか四十年だか前の、一族郎党集まったときの写真はどこにある？」

コンラート・ヒンケルは図書室の棚の埃を丁寧に払っているとこだった。彼はすぐに顔を上げて、主人の顔を見やると、ほとんど考える間もなく即答した。

「はい、あれはアルバムにはさみまして、ちょうどこのお部屋の棚に、ほかの写真などと一緒にしまつてございますが。すぐにご入用でございますか？」

少佐は首を振った。

「いや、いますぐというわけじゃあないが、あいつがこないだ自分の一族の写真を見せたからには、今度はおれのとこのを見せろとうるさいんだ。おれは別に見せて欲しいと頼んだつもりはないんだが」

執事はものわかりよくうなずいた。

「さようでございますか。そのような伯爵さまのご要望でしたら、適当な写真をいくつか見つくるってコピーをご用意いたしましょうか？　なにしろ非常に古いものもございますので、持ち歩きは少々危険かと存じます」

少佐はしばし考えていたが、うなずいた。

「そうしてくれ。それから、うちのご先祖の肖像画が一覧になったのはあつたかね」

「はい、ございます。あなたさまがまだお生まれになる前でございますが、あなたさまの大叔父に当たります方が自費出版なさいましたものがございます。その前にも何度かそのような試みがありました、これが一番新しくて詳しくうございます。家系図もついておりますので、参照が容易になっております」

「そうか。じゃそいつも引つ張りだしておいてくれ」

「ここでございますよ」

執事は微笑して、本棚のひとつから、がっしりした分厚い革張りの本を取り出した。

「ご希望の写真の入ったアルバムもこちらに」

執事は図書室をなれた様子で行き来して、また別の棚から革の大きなアルバムを取り出した。少佐が近づいてきて、興味深げにそれらを見やった。

「おれが仕事にかまけて家系図だの一族の歴史だのいうのに向きもしないんで、おやじはずいぶん腹を立てとるだろうな。おれに云わせりゃあそんなものは、老後の趣味で十分だ」

執事は答える代わりに曖昧に微笑した。そうして念のため手袋をはめてから、アルバムを開いた。

それは大判の写真を入れておく特別なアルバムだった。この百年ほどの、まだ写真といえば白黒だったところからのものが各ページに一枚ずつ丁寧に貼られている。それぞれに、それぞれの味のある家族写真や集合写真が収まっている。一家のもの、子どもたちだけのもの、おそらくきょうだいどうしのもの……単に物珍しいという気持ちからページを繰っていたらしい主人の手が、ある写真のところで止まった。

「あなたさまのおばあさままでございますね」

少佐の祖母、オーマ・シャルロッテが着飾って、白黒で立っていた。三十代だろうか。背が高く、痩せぎすで、もうすっかり腹の据わった女主人の顔をしている。きびしく、射るような目をしており、口元には微笑の片鱗すらない。美しい流線型の眉と、すつと通った鼻筋が印象的ではあるが、お世辞にも美人だなどとは云えない、身体と同じでなにかぎすぎすした、絞りこんだような顔立ちである。

少佐はしばらく黙ってその写真を見ていた。執事はじつと主人の次の行動を待った。

「このばあさんの耳飾りと首飾りは、どこにあるんだったかね」

少佐はオーマ・シャルロッテの写真を指差して云った。彼女は実家に代々伝わるという非常に大ぶりの、涙型の素晴らしい真珠を使った耳飾りと、そろいの二連になったこれまた素晴らしい真珠の首飾りをつけていた。二連の真珠の輪の下に、繊細な金細工にはめこまれたエメラルドがぶら下がり、その下

へさらにこれまた大きな真珠があしらわれている。

「はい、本物のほうは、当家のもっとも高価な宝飾品と同じく貸し金庫へ預けてございます」

「おやじの名義のやつか？」

少佐は顎をさすりながら訊ねた。

「いえ、エーベルバッツハ家の金庫でございます」

「ということは、おれが開けられるわけか。おやじに頼まんでも」

「はい、もちろんでございます。ご興味がありませんならありますので？」

少佐は意味深な微笑をひとつくれてよこして、さあ、どうだかな、と云った。

「まがいのほうでしたら、まだ大奥さまのお部屋に置いてございますよ」

執事は主人の微笑になにかを読みといたらしく、すぐにそう云った。主人は眉をつり上げて反応をしめた。

「そうなのか？」

「はい、大奥さまはよくあの真珠をお召しになりま

したが、重要な席でもないかぎりには、まがいもののほうをお使いでございました」

「それは聞いとる。一緒に預けてあるかと思つotta」

「いえ、そこまでは。まがいでございますから。ご覧になりますか？」

主人がうなずいた。執事は先だつて図書室を出、二階へ上がつていった。足取りからは、彼がこの広い屋敷じゅうをくまなく知り尽くしていることが容易にわかつた。少佐は子どもころ、よくこの男へ自分の屋敷のことについて質問を浴びせかけたのを思い出した。まだ幼い少年が一度足を踏み入れた部屋をすべて覚えておくには、この屋敷は広すぎ、部屋がありすぎ、廊下が長すぎた。執事見習いヒンケルは、クラウス少年のつたない部屋の内装の説明や、置物の外観の描写からすぐさま目当ての部屋をつきとめ、丁寧に説明しながらいっしょに向かつたものだ。

「ようございますか、ぼっちゃま、この絵を目印に

なさいませ」

とヒンケルはたとえば廊下の壁にかかった風景画や静物画を示した。

「この絵から数えまして三つ先のドアでございます。これが一、これが二、これが三つ目……さあ着きました」

執事がドアを開けると……そのドアは特にほかのドアとの目立った違いがなく、目印がないにもかかわらず……その先はきつと目的の部屋なのだった。クラウス少年はいつもこの執事の瞠目すべき業に感心して、彼をたのもしそうに見上げるのだった。

「わたくしがこのお屋敷へ奉公に上がったとき、一番最初に苦労したのがこのお部屋を覚えることでございました。ヒンケルはもうおとなでございましたが、部屋のひとつひとつをちゃんと覚えるのに、まあ二年はかかりましたでしょうか。よく迷子になったものでございます。ぼつちやまがわからないのも無理はございませんよ」

彼はそう云って、少年をなぐさめてくれた。

「ヒンケルも部屋がどこかわからないときがあったの？」

クラウス少年はびつくりして、この頼りになる従僕を見上げた。

「ございましたとも。そのことでわたくしはよく間違いをやらかして、執事や、あなたさまのおばあさまに、よくよくしかられたものでございます。あなたさまのおばあさまのおしかりは、それはそれはきつうございましたが、おかげでわたくしは賢くなりました」

ヒンケルは、「あなたさまのおばあさま」のことを語るときにはいつも、クラウス少年にわからない不思議な笑みをうかべていた。クラウス少年はその「おばあさま」についてはよく知らなかった。彼女は少年が生まれたときにはもうこの世のひとでなかった。うわさでは、きびしくておっかなくて近寄り難い存在だったらしいのに、ヒンケルのその笑みはなにか非常に柔らかないものを含んでいた。それがクラウス少年には不思議だった。

いまはもう使われていないオーマ・シャルロッテ

の部屋は、南側の日当たりのいい一角にあった。彼女は晩年下半身の神経を病んで、真夏でも両脚から下が氷のように冷えきっていると感じ、寒氣にふるえていたという。だから、この特別日当たりのいい部屋の暖炉には、そのころ絶えず火が入っていたということだ。部屋は膨大な衣装をしまっておく衣装部屋と、彼女が憩い、安らぐことのできる小さな寝室兼居間とからなっていた。暖炉の上にはマイセンの置き時計と、家族や親族の写真が並び、書き物机の上にはいまもインク壺と吸い取り紙が置いたままになっている。彼女は緑色を好んだ。壁紙もソファやクッションに張られた布も、薄いエメラルドグリーンが基調になっていて、ここは冗談に「緑の間」などと呼ばれていたのだった。

執事はいまだに大奥さまが部屋を使っているとでもいうように敬意をこめたくさで部屋へ入ってゆくと、そつと衣装部屋へ続くドアを押し開けた。少しして、濃い青の宝石箱をふたつ持ってきた。

「こちらでございます」

少佐は箱を受け取った。小さな箱のほうに耳飾りが、大きい方には首飾りがそれぞれ入っていた。まがいといっても一応ほんものの真珠で、原寸大の芯に真珠がひと巻き巻きついたものだから、それなりに迫力はある。エメラルドのほうは、ぐつと価値の劣る色合いの石を使っている、金細工はメッキで型抜きされたものだった。

少佐はしばらくそれを眺めていじくりまわしていた。執事はじつと待った。そのうちに少佐はふと微笑して、飾りを箱へ戻すと、執事へ返してよこした。

「写真と本を頼む」

彼はそう云って、部屋を出ていった。執事は箱をもとへ戻したあとも、しばらく部屋へとどまって、じつとなにか考えこむような顔をしていた。

その夜、執事は久方ぶりに大奥さまの夢を見た。正確には、執事見習いヒンケルの夢を見た。彼は大奥さま付の侍女コンスタンツェとふたりで、大奥さ

まのおともをしていた。コンスタンツエは、大奥さまの生まれたときから彼女についていた筋金入りだった。もうかなり歳をとっていたので、侍女というより、具合のよい部屋を与えられて、大奥さまの話し相手になり、軽い世話をするような、半分引退した暮らしをしていた。

三人は馬車に乗っていた。馬車をたくみにあやつっているのは、これまたひどく歳とった馬丁のヨーナタンだった。とすると、やはりこれは夢に違いはない。ヨーナタンは、ヒンケルが屋敷へ来たときにはもう恩給をもらって退職し、馬舎のそばに小さな家を建ててもらって女房とふたりで暮らしていたのだ。大奥さまはどこか大切な集まりへでも出かけようというのだろう。あの真珠の飾りをつけて着飾っていた。それは彼女の胸元へ、耳周りへ、ずっしりとした身体を横たえ、誇らしげに輝いていた。大奥さまは真の貴婦人たる最後の人種だった。途方もない衣装の数々と宝飾品の数々を持ち、それらをもっておのれを飾りたてて、家の財力と権威を誇

っていた人種の最後のひとりだった。彼女の真珠の耳飾りと首飾りは有名だった。このひとそろいのアクセサリーは、彼女が結婚に際し生家から持ってきたもののひとつで、来歴をたどれば十六世紀にまでさかのぼる。いまではもう見ることも採ることもできない大粒の天然の真珠と、非常に深い緑色をしたエメラルドが使われてい、両手にずっしりと重く、もはや貴重すぎて盗難にもあわなかるうと云われていた。シャルロット大奥さまの妹、ホルテンゼさまは、姉を訪ねて遊びに来た折など、

「あれが姉さんのものになって家からなくなったときは、ほんとに悲しかったわ！ わたしだって、いつかはあれをつけることを夢見ていたのよ。でも母の選択は正しかったわ。あれはやっぱり、姉さんのものだったのよ。あのエメラルドが、姉さんの緑の目には、よく似合ってた……わたしじゃ、きつと持て余したでしょう」

と語ったものだ。大奥さまは、青みがかった緑の、ちよつと忘れられない色の目をしていた。

「嫁がひとり来るといふのは大変なことですよ」

大奥さまはいつもの気むずかしそうな、きびしい顔つきで思案するように目を細めた。彼女の青みがかつた緑の目はそうして細めるとき、鷹のように鋭く強い光を帯びた。

「家というものは、女でほとんど決まってしまうものです。女主人というものは、使用人たちをいかにうまく統率してやりくりしていけるかという、実に難しい仕事を任されるものよ。使用人たちになめられてはいけないけれど、以前と違って、いまは使用人になろうという者も少なくなっていますからね。

あまりきびしくしすぎては続くものではないし、そのところをうまくやれるような心得のある者でないと。頭のいい、よくよく気のつく細やかな、でも決然としたところのある女でなくては……はじめのうち、相当な血を流すことを覚悟しなくてはいけないのですよ。とくに女の使用人とのあいだにはねえ！」

コンスタンツェが深々とうなずき、すっかり皺の

寄つた顔を振って、ため息をついた。

「新しい奥さまも楽じゃない、奥さまへついてくる侍女も、楽じゃございませんでしょうね。女どうしのなわばりあらそいというものが、いったいどんなものだか、あなたにやわからないだろうねえ、ヒンケル」

「わからなくてはいけないのよ、ヒンケル」

大奥さまがふいにまっすぐに、あの印象的な目をきらめかせて執事を見つめた。

「執事というものは、およそ考え得るかぎりあらゆるものごとを理解できなくてはけません。特に人間というものについては、なまかな理解では歯が立ちませんよ。執事が使用人を理解して活用できないでは、その家はおしまいです。よくよく上手に彼らを束ねていかななくては。ヨーナタンの手綱さばきをごらんさい。彼が馬たちをどれだけ理解して、具合のいいようにあやつっていることか」

ヒンケルは窓から顔を出し、老いたヨーナタンを見やった。ヨーナタンは車を引く二頭の馬たちへか

け声をかけながら、手綱を引いていた。彼は馬の走りをほめ、よく云うことをきくといつて顔をほころばせ、もう少しだからがんばるようにとはげまし、いかに馬たちを愛しく思っているかを語り聞かせていた。馬たちは、彼のことばに耳をとがらしており、うれしそうにいななき、彼が引いたり戻したりする手綱の微妙な力加減で、すぐさま主人の意図をくみとって、歩調をゆるめたりまた早めたりした。馬たちは、このヨーナタンのためならすり切れるまで酷使されても文句は云わぬと云いたげだった。

「理解と情がなくてはだめなのよ、ヒンケル」

大奥さまが云った。ヒンケルは顔を引っこめ、大奥さまを見た。

「なにごとにもね。それがあれば、たとえちよつとくらい間が抜けていてもなんでも、どうにかなるものです。今度の嫁が、そういうひとだといひけれど。でもきつとそうだろうとわたくしは思います。エーベルバッハ家の男たちは、代々女にたぶらかされるたぐいのばかりではないようだから。わたくしがこの

重たい耳飾りと首飾りとかから、解放される日も近いのかもしれないわね」

「シャルロッテさま、そんなことを……まだ早うございますよ」

コンスタンツェが泣きそうな顔で云った。

「いいのよ、コンスタンツェ」

大奥さまはうつとうしげに手を振った。

「これは、わたくしのような老骨にはもう重すぎます。わたくしはなるべく早く、これを譲り渡したいと思うのよ。またそうでなくてはいけないの。わたくしはもう使用人たちを統率すること、主人の横で肩をいからしてそびえているのにも、疲れてしまいました。この仕事は長続きのするものではないわ……なんにでも引きどきというのがありますよ」

馬車が止まった。ヨーナタンが「つきましてございます」とうやうやしく云うのが聞こえた。

「コンスタンツェはわたくしと一緒に来てちょうだい」

大奥さまは云った。



「わたくしはいかがいたしましたでしょうか？」

ヒンケルはうやうやしく訊ねた。

「おまえはいけません」

大奥さまはきびしく首を振った。

「おまえは屋敷へ戻り、仕事に戻りなさい。おまえは、新しい女主人とあの家を守るのよ。わたくしがうるさく云いつけてきたことを忘れてはいけませんよ。立派につとめを果たしなさい。いいですか、いつも最善を尽くすのですよ。うぬぼれてはいけません。自分にも他人にも、注意を怠らず、気配りを忘れてはいけません。さあ、おまえはここで降りるのです。これを持って……」

大奥さまは耳飾りと首飾りはずし、それをヒンケルへ押しつけてよこした。ふたりは目が合った。大奥さまの目が、真剣な光をたたえて彼を見つめていた。

「大奥さま……」

「ヨーナタン、馬車を出しなさい。もう時間があります」

ヒンケルは転げ落ちるように馬車から降りた。正確には、走り出した馬車からほとんど突き落とされるような形だった。

「大奥さま！」

ヒンケルは無慈悲に遠ざかってゆく馬車に向かって叫んだ。

「お戻りください！　お願いでございます、いったいわたくしにどうしろと……」

ずつしりと重い真珠が、彼の手にのしかかっていた。ヒンケルはその重みに途方に暮れていた。大奥さま、ああ……馬車が……

………執事は目覚めた。彼は思わず腕を持ち上げて両手を見やった。彼の手に真珠はなかった。しかし彼の両手は、その重みを覚えていた。彼はその重さを知っていた。知りすぎるほどに知っていた。

エーベルバッハ少佐は夜も更けてから、久々に一族の肖像画が押しこまれている部屋へ入り、順繰りに見て回った。部屋の壁一面に、一族の肖像画が順

番に並べられている。男は右に、女は左に。エーベルバツハ家の者は、代々肖像画をこしらえてもらっていた。すでに亡きクラウス少年の祖父母からはじまり、曾祖父、高祖父……と続いた。女のほうも、祖母、曾祖母、高祖母……とこれまたきりもかぎりもなく続いていた。

「グロースファーター、ウル・グロースファーター、ウル・ウル・グロースファーター、ウル・ウル・ウル……」

少佐は肖像画を見ながら順番に口ずさんだ。そうして微笑した。このウル・ウル・ウル……の不思議な旋律が、小さいころからなぜか好きだった。執事見習いヒンケルを引きずってここへやってきては、飽きずに「ウル・ウル」やったものである。クラウス少年はそんなとき、ウルを数えきれなくなるほど云ったので、まるでウルが自分の耳にいつまでも残って消えないかのような気がした。クラウス少年は延々と果てない不思議な感覚に陥り、ときどきめまいを感じた。そうなると執事見習いのヒンケルが、

あわててこれを受けとめた。

「ぼっちゃま、大丈夫でございますか？」

クラウスぼっちゃまは身体へ回されたヒンケルの手に安心して、こくんとうなずいて立ち上がった。この果てしない絵の群れが、皆自分の祖先だとは、ちよつと変な気持ちがあった。そういうものにかまれている自分が、クラウス少年はひどく不思議だった。

「今日はもう、お部屋へ戻りましょう。おやつの間も近づいてまいりましたよ。今日はぼっちゃまの好きなものが出るといいですが」

クラウス少年は手を引かれて、部屋を出ようとした。そうして部屋の入口近くに飾られていたオーマの肖像画にふと目をとめた。それは年月を経ているのでもっとも新しく、まだ絵の具も生々しい画だった。オーマの深い印象的な青緑の目が、真っ先に目に飛びこんできた。それは小さいながらも、画面の中でふたつの宝石のように光っていた。ほかにも血色のよい肌やバラ色の唇や、耳と首のまわりで白

光りしている真珠のアクセサリーが、まだぬらぬらと生きているような輝きを放っていた。オーマは、中年の婦人だった。といっても、まだ幼いクラウス少年には、それが祖母だと云われれば十分に歳をとっていると思えたのだが。

「あなたさまのおばあちゃまでございますよ」

執事見習いのヒンケルが、律儀に立ち止まって云った。

「もういらつしやらないのが残念でございます」

見上げたヒンケルの顔は、笑っているようであり、しかしなにか胸が苦しくなるような表情を浮かべていた。

「どうして死んじゃったの？」

クラウス少年はまだその意味もよくわからないで、ヒンケルへ訊ねた。

「ご病気でした。お歳を召して、身体中がくたびれてしまい、亡くなってしまったのでございますよ。

惜しい方でした。大奥さまには、もっとわれわれ使用人を手厳しくしつけていただきとうござ

いましたし、ぼっちゃまの大きくなるのを見ていていただきとうございましたが」

クラウス少年はよくわからなかった。ただ、ヒンケルが残念がつているのはわかった。

「あなたさまも、大きくなったらこのような方をお嫁さんになされば、きっとよろしゅうございます」

クラウス少年は疑り深い顔でオーマの肖像画をふたたび見た。クラウス少年は、お嫁さんのことについてはまだよくわからなかった。ただ、こんなひとでは歳をとりすぎている、と思った。

「ぼく、こんなお年寄りをお嫁さんにしなくちゃならないの？」

ヒンケルは吹き出した。それから、笑いながら申し訳ございません、と云った。

「ぼっちゃまは、もっと若くて、ぼっちゃまにお似合いの美しい方をお嫁さんになさいますよ、きっと。このヒンケルが、命にかけて保証いたします。さあ、オーマにさよならを云って、もう行きましょう。少し身体を動かしたほうがよろしゅうございます」

クラウス少年は、ヒンケルへ手を引かれて部屋を出た。オーマのようなお嫁さん、というヒンケルのなにげないひとことはしかし、小さなクラウス少年の心に、あの強烈な青緑の目とともに、しばらくのあいだ、引っかかったままであった。少年はまるで自分の結婚相手がもう決められてしまっているみたいに感じた。彼はしばしばオーマ・シャルロッテの痩せていてけわしい、お世辞にも優しいとか柔らかいとか云いかねる顔を見るために、肖像画の部屋へ行ったり、昔のアルバムを見せてもらったりした。

そうして、きまっておなかでも痛いような顔で、それと大差ないような顔のオーマを見るのだった。オーマは、たいてい同じ真珠の飾りをつけていた。ひどく大きくて、つやつやしたアクセサリーは、古い集合写真の中でもすぐに見わけがついた。こんなやうなのをしている女性はいなかった。このなにやら威圧的なほどの真珠のために、もとより背の高いオーマはまた一段と周囲を圧倒するような気配を帯びていたのだった。妹のオーマ・ホルテンゼと並んで

いる写真など、クラウス少年はこれが姉妹だというのがどうしたって信じられなかった。オーマ・ホルテンゼはぼちゃぼちゃしていて明るく、声が大きくて、目は澄んだ青で、ときたまクラウス少年の顔を見に来て少年の父親をたじろがせるほどに元気で健在だった。少年は子ども心に、なにかこの自分のオーマ・シャルロッテが、ひどくかわいそうな、孤独なひとのような気がしていた。同時になにか力強いものを感じてもいた。クラウス少年はいつの間にか子どもなりに、この近寄りがたい雰囲気のおーマの奥に潜んでいるものを嗅ぎつけていたのだった。

「ぼくのおーマ」

と彼は口に出してみた。それは、ぼくのおかあさん、と云うのとぜんぜん違った。第一見た目からしてぜんぜん違っていた。少年のおかあさんは、美しい、優しそうな顔立ちのひとつだった。でもオーマは！ なにかが決定的に違っていた。でも、クラウス少年はしだいに、この「ぼくのおーマ」に不思議な愛着を持つようになっていった。年を経てごくたまに彼

女の写真を見る機会があると、この鉄の意志の塊のような、燃え立つようなオーマの青緑の目が、なか自分の目の中で燃えてはいはしまいかと考えることがあった。

エーベルバツハ少佐はオーマの肖像画の前に立った。彼は肖像画を見上げ、微笑した。オーマ・シャルロッテとエーベルバツハ少佐とは、その色こそ違えどまことに同じような目をしていた。

## 2 誕生日会場の話

「今年のお誕生日はねえ、バルカン半島へ行くよ……かのドウブロヴニク、アドリア海に浮かぶうるわしい都へ」

少佐は寝転がって目をつむったまま、あまり興味がなさそうに受話器の向こうへ「ん」と返事をした。

「そこに住んでいるお友だちの担当なんだ、今年はね……きみは今年も仕事なの？」

少佐はまた実に氣のないふうで、きつとそうだろうと云った。

「まあ、そうだろうね」

伯爵さまはにやにや笑いを浮かべているらしい調子で云った。

「きみはそれでいいのさ」

少佐は電話を切ってメリーさんのひつじをやり、眠りについたが、頭のなかでしきりになにか新しい考えが渦を巻いて、形を為そうとしているのを感じた。今年の誕生日は、もちろんエーベルバッハ少佐

は例年のごとく仕事であって、例年のごとく仕事でありながら現場へ駆けつける予定だった。

クロアチア……ドウブロヴニクか……アドリア海の真珠だかなんだか云われておる観光地だ……ルフトハンザで行けば具合がいい、ドイツの航空会社は信用できるから……アドリア海の真珠か……あいつの誕生日は二十八だ……それまでに……そうだ、今回は執事をみやげにつけてやろう。執事がおれの計画についてどう思うか、直接そのときに聞いてみなければなるまい……執事がわめくようなら、多少は考えなおさにやならんかもしれんから……二十八か……まだひと月以上ある！

エーベルバッハ少佐はうつらうつら考えて、ひとりでにやつきながら、いつの間にか眠りについていった。

このうるわしいアドリア海沿岸をクロアチアが占領してしまっているのは少し不公平じゃないかしらん、と伯爵さまは思った。ボスニア・ヘルツェゴビ

ナにだって少しくらい権利があるはずなのに、沿岸一帯はみんなクロアチアのものだなんてちよつとどうかしている。地図によると、アドリア海をのぞむ両海岸をイタリアとクロアチアがほとんど独占していて、モンテネグロとアルバニアがイオニア海へ抜ける手前を申し訳程度に一部所有しているといったありさまだった。それにしてもイタリアはめぐまれすぎている。いずれも青く美しい地中海とアドリア海を、国の両側で享受しているなんて。まあでも、そんなことは観光客には関係のないことだ！ 地政学や国境線の問題は、学者や政治家が勝手に云いあらそえばいい！ 伯爵さまは微笑し、地図から目を上げた。ともかくも、目の前にはまぶしいエメラルドグリーンに輝くアドリア海が広がっている！

伯爵さまは、このたびの主催の招待によつて、七月二十日、正しくロンドンの邸宅よりドウブロヴニクへ運び出された。正確には、彼らがいるのはドウブロヴニク湾から少し南西に離れたところにぼつんと浮かんでいる島で、その島は正しくこのたびの主

催の所有地であり、ドウブロヴニク湾からボートやクルーザーに乗つて移動するのだ。

アドリア海をはさんで向こうに住んでいるボロボロンテは、みんなのためにもてるクルーザーやボートを総動員した。彼は名うてのイタリアマフィアであり、地中海もイオニア海もアドリア海も自分のものだと思つていたから、自分が移動手段を出す云つてきかなかつた。そうしてなにをどうねじふせたのか、イタリアからどしどし真つ白なやつを送りこんできて、いくつもドウブロヴニク湾へ浮かべた。

きわめつけは伯爵さまの名を冠した客船だった。ボロボロンテは伯爵さまを愛するあまり、彼の名をつける許可を取りつけた優美な客船を特別に作らしており、それを引っぱり出して自慢する機会をいつもねらつていた。空港からぞろぞろとやってきた老若男どもは、工場の製造レーンに乗せられた商品よろしく順繰りにこの純白の客船につまれ、深紅と金とでみごとに統一された船内で伯爵さまが来るのを待った。ボロボロンテの忠実な手下どもと主催の使

用人たちが大わらわで、タラップに赤い絨毯を敷いたり、シャンパンとグラスとオードブルの用意をしたり、伯爵のために撒く白と赤のバラの花びらをむしって準備したりしていた。

伯爵さまはより抜き的美青年たちに取り囲まれて姿をあらわした。お友だちはみんな元気に手を振って伯爵を迎え、タラップから船内へ順序よく並んで、彼に向かつてバラの花びらを撒いた。伯爵さまはお友だちのひとりひとりに各駅停車して、キスしたり抱きしめたりして挨拶を交わしたため、この行列のあいだをぬけきったころには、例のうるわしい巻き毛は花びらまみれになっていた。

それからみんなしてシャンパンを開け、船は島へ向かつて景気よく汽笛を鳴らして出港した。今回の主催は、みんなに向かつてスピーチをした。彼は今年のお誕生日会がなんといっても一番だったと後々までも語り伝えられるように全力を尽くす、と云って、みんなの盛大な拍手を受けた。

船が島の入り江に着くと、伯爵を先頭にみんなわ

らわら船から下りて、島の上におっ建てられた白亜のホテルへ向かった。五階建ての立派なホテルで、このお誕生日会のために特別に作られたものだった。彼らはホテルの空調の利いたレストランやスパや屋上のプールなどを案内されたのち、それぞれあてがわれた部屋に連れて行かれた。伯爵さまは最上階の特別室をあてがわれた。若いハンサムなボーイが荷物を運んでくれた。ボーイは伯爵さまへたつぶりの感情のこもった目配せをしてよこした。

ホテルのある島はすばらしかった。起伏の少ない歩きやすい島で、どこもかしこも美しい樹木に覆われていた。島の周囲は天然のビーチで、ひとがビーチでするようなことはなんでもできた。散策用の小道が整備され、島じゅういたるところにある美しい眺めを楽しめるようになっていた。みんなはじめのうちは島を興味深く眺め、続いて要塞に囲まれたドウブロヴニク旧市街へ繰り出したり、海岸沿いにある島々をうろついたりしたのだが、いかんせん夏だったので、どこも観光客でいっぱいだった。伯爵さ



まやそのお友だちが、そうした一般の観光客に紛れていいものだろうか？ みんな疑問に思った。そこで、みんな早々に観光をよして、おもに浜辺で過ごしたり、具合のいいホテルの部屋やプールでごろごろするようになった。

### 3 七月二十五日の話

そうしたある日の午後……正確には七月二十五日の午後だったが……ひとりの男がドウブロヴニク灣へあらわれた。男は長身で、鍛えられた身体つきをしていた。麻の涼しげな白シャツと紺色のズボンを着て、左手には相当に年季の入ったトランクをぶら下げていた。このような陽気の中ではいささか暑苦しい黒髪を頭の後ろでひとつにしばっており、日差しから目を守るためにサングラスをしていた。

この男のうしろに、影のようにつきしたがうひとりの男があつた。暑苦しいお仕着せを着て、やや時代錯誤なりっぱな八の字ひげをもち、悲しくもときの流れによつてうしなわれた頭髪を、長く伸ばした側面の毛をなであげることにどうにかとのかとっている。この男は、前を歩く男の従僕だつた。それは誰の目にもあきらかだつた。というのも、彼はあきらかにそういう服装であつたし、そういう態度であつたし、そういう行動をとつたからである。こ

の従僕は軽々と大きなトランクを抱えて、前を歩く主人に決して後れをとらず、非常に厳格に一定の距離を保つてつきしたがっていた。従僕はときおりポケットから白いハンカチを出して額の汗を拭い、そのたびに、さも前を歩く主人の額の汗も拭つてさしあげたいと云わんばかりの顔で、おのが主人を見やるのであつた。

従僕とその主人とは規則正しい足取りでやつてきて、港の船着き場で立ち止まつた。海は青々として、大理石の港は白く、太陽は陽気に仕事をしており、正しく夏の海辺だつた。主人はそういうもののいつさいかまわずあたりを見回した。そうして、一艘の小型のクルーザーに目を留めた。彼はそれに見覚えがあつた。正確には、クルーザーの前でひまそうにしている、黒スーツにサングラスという港に調和しないかつこうをした男に見覚えがあつた。そのあたりには、同じようなかつこうの男たちに守られたクルーザーやボートが、まだいくつもあつた。

黒髪男は従僕をそこへ静止させて、果敢にクルー

ザーへ近づいていった。クルーザーの前に立っている男が気がついて、ぎょつとした顔をした。そうしてあわや逃げ去るかというところまでいったが、思いとどまったらしかった。スーツの男はかちこちになって、不器用にやってきた男に笑いかけた。

「やあ、こいつはどうも……お久しぶりで、大将」

彼がおどおどそう云うと、あたりにいたスーツたちが周りを取り囲むように近づいてきて、ぴんと背筋をのびし、「お久しぶりです、大将！」とやった。こんな美しいエメラルドグリーンの海を目の前ににした港で、スーツの目障りな男たちがいつせいに声をそろえると、かなり不気味だった。

「少佐だ」

男はいやそうに顔をしかめて訂正した。スーツの男たちは「少佐！」と訂正して叫びなおした。少佐に話しかけられた男は、へつらうような態度で曖昧な笑みを浮かべた。この男は以前に、この少佐によってちよつと痛めつけられたことがあったのだ。ボスの屋敷へなんとしても進入しようとしたこの少佐

によって。少佐は真剣で、いまにも自分の頭をぶち抜きかねなかった……実に涼しい顔で。思い出して身震いがする！

「こいつは、きみんとこのボスの持ち物かね？」

少佐はクルーザーを、サングラス越しに検査でもするように眺めながら訊ねた。男はちよつと縮みあがつて、へえ、さようで、と云った。

「相変わらずくだらんことに金をかけとるな」

男はどう応えたものかわからなかった。それで、はあ、と曖昧に云った。

「ちよつとこいつを借りてもいいかね？ それとも、

今後すぐにでも使う用事があるかね？」

「いえ、まあ、その、借りていただくぶんには問題ないんですが……」

男は助けを求めて周りにいた仲間たちに視線を向けた。一番ものわかりのよさそうなスーツが一歩進み出てきた。

「島へ移動なさるんで？」

「のつもりなんだが、場所を知らんのだ。誰か連れ

て行ってくれんかね？」

男はちよつと考えこんだ。

「伯爵でしたら、今日はちよつと足を延ばして、何人かといつしよにヘルツエグ・ノヴィへ遊びに行つてゐるんですがね。夕方にはここへ戻ると思ひますが」

少佐は肩をすくめ、今日はせつせと飛行機で移動してきたのだから、このうえモンテネグロまで出張する気はない、と云つた。ドウブロヴニクと隣国モンテネグロの港町ヘルツエグ・ノヴィは、距離にして三十キロ程度しか離れていなかったが、国境での混雑も含めて結構な移動時間になるのは避けられない。

「おれはいま喉がかわいとりんだ。涼しい室内でビールが飲みたくてしょうがないんだ」

ものわかりのよさそうな男は、ものわかりよくうなづいた。そうして、自分が担当しているボートへ少佐を案内した。少佐は従僕を促した。それまで主人の命に従つて直立不動を貫いていた従僕は、重たそうなトランクを持ち上げて主人のもとへ駆け寄つ

た。

「おたくのボスは、このボートやらクルーザーやら一式を、みんなイタリアから引つ張つてきたのかね？」

ものめずらしそうにボートを見回しながら少佐は云つた。

「なかなか大変な労働でした」

男はものわかりよくうなづいて云つた。

「だらうな」

少佐もまたものわかりよくうなづいた。

「氣をつけてくださいよ。いまエンジンかけますから」

少佐は席へ座り、従僕を後ろに座るように促した。従僕はいささか不安げな顔をして、おっかなびつくり腰を下ろした。少佐はそれを見届け、そうしてなにげなく目の前にあつたダツシュボードを開けた。地図といつしよに手榴弾や縄、ライフルが入っていた。少佐はものわかりよくうなづいて、ダツシュボードを閉めた。

「念のための装備ってやつでしてね」

男は云った。少佐はそうだろうとものわかりよく云った。たぶん、それであわれな海上保安担当の役人かなんか、しめあげたのだろう！

白亜のホテルは島のご真ん中に神殿のごとくにそびえ立っており、なかなか盛大な感じを与えた。島を囲む海と、円柱を配した白亜の建物との対比は、正しく明晰で明確でギリシア的であった。そもそもドゥプロヴニクの街周辺は、海にしか興味のなかった古代ギリシアのひとつだが、その立地を見込んでせっせと植民活動をして、その礎を築いたところなのだ。その後ローマ帝国が本格的な要塞都市として街の建設に着手し、ラグシウムという都市を作り上げた。遠くギリシア・ローマの伝統を、このホテルは正しく体现しているわけだった。

ホテルの前庭には人工の池と噴水が設置されていて、清らかな水を常時噴き上げていた。色とりどりの花が夢のように咲き誇っていた。大きく開かれた

玄関の前には門番が立っていて、少佐とその従僕とをじろりとひとにらみしてよこしたが、その後ろにくっついてきたスーツ姿の男を見てにらみをきかすのをやめ、また無表情に戻ってはるか前方を見やった。

エントランスは広かった。ぴかぴかに磨かれた滑って転びそうな床の先にレセプションのカウンターがある。左右にはバーとレストランがしつらえられてある。いずれもオープンテラスの席つきで、海を眺めながらゆったり酒を飲んだり食事をしたりできるのだ。

少佐は従僕をしたがえ、カウンターへ突進していった。カウンターの中にはうるわしい金髪的美青年がひとり立っていて、少佐ににこやかに、かなり含みのある、軽薄そうな笑みを向けてきた。少佐は含むところへ気づかないふりをするのにちよつと苦勞した。

「こちらの方を、伯爵のお部屋へご案内してさしあげろ」

スーツの暑苦しい男が云って、いかにもものわ  
りよくせよとばかりにちよつとすごんでみせた。美  
青年はしかしびくともしなかった。相変わらず陶然  
と微笑んで、少佐を上から下までねつとりと見つめ、  
そのまま目を逸らさずにベルを鳴らしてボーイを呼  
んだ。やつてきたボーイはどうやら普通の男らしか  
った……がつしりした若い男で、彼はきびきびと少  
佐のトランクを引き受け、続いて従僕のものを引き  
受けようとしたが、彼は譲らなかつた。ボーイはす  
ぐにあきらめて、最上階へ案内すべく、エレベータ  
ーへ向かつていった。少佐と従僕はついていった。  
スーツ姿のボロボロソテの手下も従つた。四人はエ  
レベーターへ乗りこむと、誰からともなくため息を  
ついた。

「あの受付坊やは、今回の主催の男の愛人なんだそ  
うで」

手下がげんなりしたように云つた。

「どうしても受付するんだってんできかなかつたら  
しいですよ。ろくすつば働いたこともないらしいで

すが。思うんですがねえ、あいつあ少し、足りない  
ですな」

手下は自分のおつむを指先で示した。

「あの目はなんとかならないもんなんですか？」

ボーイが半ば怒つたような声で云つた。彼は今回  
の主催の使用人のひとりであつたが、性的嗜好はご  
くノーマルだつた。彼はこのホテルで目下とりおこ  
なわれている狂態に関し、常識的な男として、もは  
や我慢の限界を感じていた。

「そいつは難しいだろう。あの坊やは、男と見るや  
あの目をしちまうという反射神経があるのに違いな  
い」

少佐がものわかりよく云つた。従僕は悲しげな顔  
で黙っていた。男たちはふたたびため息をついた。

エレベーターが最上階について、ぼーんという軽や  
かな音を鳴らした。男たちはぞろぞろ出てきて、敷  
物がふかふかしすぎて物音もたてない廊下を歩き、  
洗練された木目のドアの前で立ち止まつた。ボーイ  
がカードキーを取り出し、しばし迷ってから少佐へ

渡した。少佐はためらいなく部屋を開けた……中はかなりきれいだった！ 下着が散乱しているとか、ガウンが脱ぎ散らかされているとかいうことなしに！

実際、部屋はよく手入れされていた。伯爵という手のかかる人間が住んでいることを考えれば、これは驚くべきことだった。左手に靴棚が置かれた短い廊下を抜けると、ソファとテーブル、テレビ、書き物机が置かれたリビングだった。正面の壁一面が窓で、広いテラスにも出られるようになっていた。ボーイはきびきびと歩いていつて荷物を置いた。少佐は彼に礼を云ってチップを渡した。従僕がさっそく縄張りを巡回するようにうろつきだした。ボロボロの手下は物珍しそうに部屋の中を見回していた。「きみたち港にいた連中は、いったいどこで生活してるのかね？」

少佐は興味を持ってたずねた。

「労働者部屋ですよ」

手下はにやりと笑った。

「ホテルの地下に、労働者諸君が寝泊まりする場所があるもんでしてね。われわれは宿泊者諸兄のために、島とドウブロヴニク湾を往復してるわけですが、その宿泊者諸兄が全員島へ戻ると仕事じまいなんで、休むことが許されるわけですなあ。ビールかワインの一杯と、まかない料理があてがわれてね……」

手下はにやにやと陰気に笑い、ボーイといっしょに出て行つた。少佐はマルクス主義によつてもとうとうくつがえされなかつた世の労働格差というもの、いずこにも及んでいることについてしばし考えを巡らし、それから部屋の検品に取りかかった。

広いリビングの左手に寝室へ通じるドアがあつた。少佐はそこへ入つていった。鏡台と長大なベッド、小さなソファとテーブルのセット、などが配置されており、こちらにもまた大きく窓が取られ、美しいアドリア海を見渡せるようになっていた。少佐はバスルームに通じるドアとクローゼットへのドアとを確認して、まずはいつもの盗聴器並びに隠しカメラ一式についての警戒儀式を行つた。これは習慣であつ

て、信頼の問題ではない。

執事のコンラート・ヒンケルが近づいてきた。

「ご主人さま、お荷物はすべておさめるべきところへおさめましてございます。許可をいただけましたら、わたくしはこれからあの受付へ行つて、使用人用の部屋を一室借りて参りたいと存じます。状況によつては、しばらく時間がかかるかもしれません」

少佐はまじまじと執事を見た。彼はきわめて沈着だった。彼は微動だにしていなかった。こんなところへ同行するように命じられ、こんな得体の知れない建物へ放りこまれてなお、この驚嘆すべき執事のヒンケルは、おのが職務を全うすることに全力を捧げていた。

「この部屋の手入れはどうだ？ おまえの感想は？」

少佐はにやにや笑いながら訊ねた。少佐は先ほど執事が、もうなにか難しい顔をして洗面台を磨いていたのを見ていた。執事は案の定眉間へひとつしわを刻んだ。少佐は促した。

「僭越ながら申し上げますと、非常に表面的かと存じます」

執事は苦しげに云った。少佐はうなずいた。

「このような大がかりな宿泊施設になりますと、やむを得ないことでございますが。しかし、このわたくしが参りましたからには、そのような勤務態度をこの部屋へ適応することは、断固許すわけに参りません。わたくしはその点これから交渉するつもりであります。この部屋はいまを限りにわたくしの責任によつて管理できるよう、交渉して参ります」

執事はこれから敵陣へ撃つて出ようという勇将のような、戦闘的な猛々しい顔つきをしていた。少佐はうなずいて、彼の軍事作戦を執行することを許可した。

「お部屋でくつろがれるのであれば、寢室のテーブルの上にお着替えを出してございます。バーへ行かれるのにお召し替えが必要でしたら、クローゼットが一番右へひとそろいかけておきましたので、そちらをお使いくださいませ。お靴はその下に置いてご



ざいます」

執事はいつでも完璧だった！ 完璧な、神のごとき執事はこのような神託を残して部屋を出ていった。少佐はしばし考えこみ、それから微笑して、せっかくの執事のまごころを無視して着替えもせずにベッドに転がった。こんな大きなベッドでひとり寝していたのでは、伯爵もさぞさびしかったろうと思われる。少佐はにやにや笑った。しばらくしてから、彼は起き上がった、シャワーを浴びた。それからおのれの猛烈なものの渇きのことを思い出して、部屋を出て一階へ降りていった。

あたりに執事の姿はなかった。少佐はしかしあまり気にせずに、いさましくバーへ進軍していった。バーの中には数人先客がいた。皆伯爵さまのお友だちで、あちこちのテーブルでグループを作って、あるいはひとりで、なにか飲みながら話したり本を読んだりしていた。伯爵さまのお友だちは、皆が皆伯爵さまといっしょにお出かけできるほど若いのも、行動力があるのでもない……たいていの連中は年を

取りつつあり、そのことを自覚しており、伯爵といっしょになってなにかするよりも離れて見守っているほうがいいのだった。バーに引っかかっている連中は、入ってきた少佐を見たが、すぐに見なかったふりをした。少佐と彼らの関係はおしなべて微妙であって、少佐は相手が誰でもぜんぜん気にしないでいる態度を貫いていたし、向こうは向こうで少佐にどう接したらいいのか永久にわからないので触らぬほうがよいという感じだった。

カウンタ―の中で五十がらみのバーテンがひまそうにグラスを磨いていた。少佐はカウンタ―へ座った。そうしてもみ手をしながら、さあおれの乾ききった喉へビールを与えてくれ、と云った。バーテンは瞬時おどろいた。毎晩とんでもない値段のブランドーだのシャンパンだのといった連中とばかりつきあっていたので、ビールを注文するような客が来ようとは思わなかったのだ。バーテンはうれしかった。彼は高級酒よりはだんぜん安酒とビールを愛する人間だった。彼はよろこび、はつらつとして客の注文

にしたがった。

伯爵さまは夕方になって、取り巻きのお友だちとともに島へ帰港した。彼は今日は、ドウブロヴニクの隣町、モンテネグロの最西端にあるヘルツェグ・ノヴィあたりへ出張して、ビーチを冷やかしたり、教会を見て回ったり、カフェでくつろいだりするつもりだった。観光シーズンで、町はにぎわっていた。

ビーチにはごろごろしているひとたちがたくさんいた。歩き回っている途中でそれを見ると、伯爵さまはふいにここにいるのがいやになった。バカンスシーズンになると一斉に町へ押し寄せ、地元住民の安静をおびやかすひとたち。伯爵さまは自分がそういったいち観光客になることに、なにか非常に深い疑問を感じてしまったのだった。そこで、彼は早々に町を出て、このあたりの沿岸に浮かぶ小さな島々を見て回ることにしたのだった。

島のほとんどはごく小さく、無人島だった。いくつかの島にはひとが住んでいないにもかかわらず修

道院があった。荒れ果てた無人島にも、十二、三世紀のころに建てられた小さな、素朴な修道院が残っていることに伯爵は感動した。修道院の中は通常立ち入り禁止のところもあったが、お友だちの口添えがあったので伯爵さまご一行は特別に内覧を許されていた。中には感動的な、いかにも木訥な壁画があった。聖人や天使やキリストやマリアの描写は丁寧で、素朴で敬虔だった。たぶん地元の画家か、このあたりでちょっとは名のしれた職人がこさえたのだろう。伯爵さまは壁画と対面し、悠久のときの流れと、中世人の信仰の強さと、そうしたものがもたらす無上の幸福や美についてうっとりと考え、満足して、ほこりっぽい、なにか冷え冷えとした建物をあににするのだった。

伯爵さまはうっとりしたままホテルへ戻った。受付坊やの美青年は、伯爵へ格別ねちっこい視線をひとつられてよこした。伯爵はしかし、もうそれに慣れていた。この美青年のもののみならず、伯爵はこの手の視線にはめったに動じることがなかった。で、

彼は軽く受け流して微笑を返し、今日はなにかおもしろいことはなかったの、いつものように訊ねた。

美しい金髪青年は、美しさを無遠慮な武器にできる人間だけが持ちうるような、不遜で傲慢な感じを隠そうとせず、バーにお客さまが見えてるみたいですよ、と云った。それからやや挑発的な目つきをして、すねてるんだから、というようにそつぽを向いた。この青年の頭の中では、伯爵はもうとつくに自分を欲してもいいはずなのだった。彼はそのことを、自分が権力者の愛人だからだというふうに解釈していた。触らぬ神にたたりなし！しかしそれもまた、青年をなにか非常に満足させる側面を持っていた。伯爵さまは笑って、この尊大な青年に礼を云って投げキスをひとつすると、バーに入っていった。

「客って、いったい誰なんだい？」

伯爵をいつも取り巻いている、これまたうるわしい青年のひとりが受付坊やへ訊いた。

「知らないよ……黒髪のけっこうハンサムさ」

受付坊やは好奇心を隠さずに云った。それから受

付坊やを含めた数人の美しい青年たちは、自分たちが今夜いっただう過ごすかというようなことについて議論をはじめた。彼らは彼らで、よろしく好きにやっているのだった。

伯爵さまがバーへなぐりこむと、カウンターで少佐がすつかりくつろいでいた。彼はバーテンといちじるしい親愛の情を交換したかに見えた。少佐は機嫌よく笑って、バーテンのおもしろおかしい話でも聞いているらしかった。彼は巨大なビールのジョッキを目の前に置いていた。

伯爵さまは後ろからそつと歩み寄った。そろそろと少佐の真後ろへ進んで、それから急に両手を出して少佐の目元を覆った。

「お客さま、夕方からそのように巨大なジョッキでビールを飲むとは、少したしなみがないのじゃございませんか？」

云いながら伯爵はくすくす笑った。少佐はふん、と鼻を鳴らした。

「夕方からじゃない、昼からだ」

伯爵さまはゆっくり手をおろした。そうして少佐の顎に手をかけて上を向かせた。

「酔っぱらってはないね！」

伯爵さまはとっくりと少佐の顔を眺めてから、高慢ちに云いはなった。

「ビールはアルコール飲料じゃないからな。酔うわけがないんだ。これは純粋な飲料だ」

少佐は微笑した。

「暑さと喉の乾きにはこいつが一番きくんだ」

「ばかなこと云ってるよ、このドイツ人は」

伯爵さまはそう云って、少佐の首ったまにすがりついた。バーテンはあわてて腰を屈めて、カウンターの下にある氷の入った容器をがらがらやった。

「来てくれたんだねえ、きみは！」

伯爵さまはうれしさをとめて隠さずに云った。

「そんならそうと、せめて昨日のうちか、今日の朝にでも連絡をくれればよかったんだよ。そうしたら、こんなところで半日飲んだくれなくてすんだのに。わたしといっしょに無人島を探索できたんだよ！ 無

人島の中にある修道院とね」

「モンテネグロに出張したんじゃないのかね？」

「したことはしたよ。だけど、あんまり観光客ばかり多くて、いやんなっちゃった。それに結局、あの町は浜辺でごろごろする以外に特にこれといったものがないんだもの」

少佐はそうかと云った。

「そういえばきみは、よくここへ来れたねえ！ どんな手を使ったのさ？」

少佐はボロボロンテの手下のひとりと遭遇し、ポートで運搬されてきたことを語った。伯爵は笑って、あとでボロボロンテさんにお礼を云わなくっちゃ、と云った。それから少佐の腕をとって、いっしょに飲むためにカクテルを注文した。

彼らは食事のためにいったん着替える必要があった。部屋へ行ってみると、執事がドアの前で待っていた。伯爵さまは目を見開いた！

「コンサート！」

伯爵さまは執事に駆け寄っていつて飛びついた。

「どうしたの！　いったいきみは、こんなところで油を売っていていいの？　きみのご主人がきみを拉致したの？　それともきみの職場がきみを放り出したの？」

「そのいずれにも該当しないかと存じます、伯爵さま」

執事は寛大な微笑を浮かべて云った。それから、しゃつちよこばって伯爵さまへ挨拶した。伯爵さまはいつものように、執事を抱きしめ、髪の毛にとぼしくなった頭頂部へ頬ずりをして、親愛の情を表現した。

「きみが来てくれてうれしいよ、わたしは。だって、きみがいるってことは、わたしが好きなかだけきみに用事を云いつけることができるってことだもの」

「そのようにしていただきますことは、わたくしにとりましても光栄でございます」

執事は伯爵さまの腕の中で赤くなっていたが、か

ろうじてしゃきつとして威厳を保っていた。少佐はにやにや笑ったが、すぐに主人の立場を思い出して、執事にいったい作戦の首尾はどうだったかと訊ねた。

「はい、上々でございます。まず、わたくしめはこの階に自分の部屋をひとつ確保いたしました」

少佐は眉をつり上げた。

「なに？　この階にか？　まさかうちのとなりじゃあるまいな？」

「いえ、めつそうもございません。客室ではございません。物置がございまして、交渉の結果改装する許可を得ました」

少佐と伯爵は顔を見合わせた。

「それはひとつ見てみなくちゃならないと思うな！」

伯爵さまが云った。少佐はうなずいて、執事に案内を命じた。

執事は廊下をつきつて、従業員以外立ち入り禁止と書いてあるドアを開けた。廊下と階段があり、従業員用エレベーターと、ドアがいくつか並んでい

た。トイレマークのあるドア、リネン室とやら、物置……執事は右端のドアを開けた。中は物置だった……少なくとも、数時間前までは。いまは天井からぶら下がったランプに照らされた細長い小さな部屋に、簡易ベッドがひとつと、小さなテーブルがひとつ、それに、更衣室にあるような細長いロッカーがひとつ置かれていた。部屋の右隅にバケツの水をくんだりするような洗面台がぼつんとあり、その上に小さな窓が開いていた。テーブルの横に執事のトランクが置いてあった。

「これがおまえの穴ぐらか？」

少佐が疑り深い声で云った。

「僭越ながら申し上げますが、この建物にはいささか空間的な無駄が多いように感じられます」

執事は残念そうに云った。

「おかげで、このような部屋をひとつ手に入れたのでございますが」

「お風呂はどうするの？」

伯爵さまが心配そうに云った。

「三階に、使用人用のシャワー室がございます。階段を使うか、従業員用エレベーターで行き来すれば、皆さまの目に入ることもございません。お気遣いおそれいます」

「ここは殺風景すぎるよ」

伯爵さまが怒ったように云った。

「これは部屋じゃないよ！ 壁に絵のひとつもかかってないし、花瓶のひとつもないなんて」

「わたくしは満足でございますが」

執事はやや恐縮して云った。

「まあいい。装飾の問題はあとと解決するとして、とりあえずおまえが寢床を確保したことはわかった」

執事はふたたび「恐れ入ります」と云った。

「きみに用があるときはどうするの？ 受付へ電話して、わたしの使用人を呼んでくれと云うの？」

執事は実に痛ましいといわんばかりの顔になった。

「その件に関しまして、わたくしはいささか残念なお知らせを申し上げますはなりません」

執事はポケットから四角くて薄いものをふたつ取り出した。

「これはレストランの厨房で従業員が使用しているバイブレーターなるものだそうでございます」

執事は同じような大きさの、黒くて四角い板のような機械をふたりへ示しながら云った。

「ご主人さまか伯爵さまがこちらの機械についている、この赤いボタンを押しますと」

執事は云いながら片方の板の真ん中についた赤いぼっちを押した。するともう片方の板つきれが震えだした。執事は微笑した。

「このように、もう一方の機械が震える仕組みになっております。わたくしはこちらの震えるほうを常に携帯いたしますので、ご用の際には、このように赤いボタンを押してくださいませ。すぐに参ります。このような方法しか取れず、まことに申し訳ございません。しかし、受付に立っております男が、まるで使いものにならないのでございまして。そのほかは悪くないようでございますが、それだけが、たい

へんに遺憾でございます」

少佐と伯爵は顔を見合わせた。

「あまり好ましいやりかたとは思えないよ」

伯爵さまが云った。

「きみをレストランの注文かなにかみたいに機械で呼び出すなんて……」

「はい、その点はいささか過剰に文明的で非人道的でございます、わたくしといたしましてもたいへん遺憾なのでございますが、これよりほかにいい手がないのでございます。あの受付の軽薄な男をどうにかするよう抗議しようかとも思いましたが、あまりことを荒立ててはと……」

「それが正解だな」

少佐は笑いながら云った。

「おまえの基準は、当節ありえないほどに嚴格だからな。あまりあちこち首をつっこむと、煙たがられて追い出されかねん」

執事はぐつと顎を突き出し、瞬時挑むような顔になった。

「それは存じております。しかし、おことばではございませうが、わたくしは少なくともご主人さまへの同行を許された身として、ご主人さまと伯爵さまがここへお泊まりのあいだは、わたくしの基準というものを曲げるわけにまいりません。及ばずながら、最善をつくす所存でございます」

いったい誰が、このおそるべきコンラート・ヒンケルの基準というものをくつがえせるものか？ 少佐は肩をすくめて、好きにしろと云った。それから少佐は夕食の着替えのことを思い出して、伯爵さまに急ぐように云った……彼の着替えは手間がかかる。執事は伯爵さまのお着替えを手伝うべく、ふたりのあとをしずしずとついていった。

主催の食事前のスピーチは退屈だった。彼は極度のスピーチ魔だったのだ！ それが彼の唯一の目立った欠点だった。みんな連日これをやられていささかうんざりしていた。長々としたやつが終わるとやっとな食事になった。伯爵さまと少佐の席では、執事

のヒンケルがレストランの従業員にかわって給仕をした。彼の給仕はふるっていた！ 彼はずば抜けて手慣れていた。彼の料理を運ぶタイミングはほかのテーブルとぜんぜん違った。主に伯爵さまが食べ終え、その余韻が消え会話が切り替わるタイミングを見計らって次の料理が出された。執事は伯爵さまのグラスへ注ぐワインの量も心得ていたし、主人が飲むものとその量も心得ていた。執事は暑苦しいお仕着せを着て、それだけでも抜群に目立っていたのに、給仕のあいだはぜんぜん存在感を感じさせなかった。伯爵さまがときおり給仕のあいまに「そうだろう、コンラート？」と云うと、まるでこれまでの会話を全部聞いていたかのような返事をした。

「いい使用人だ。おれならあれに年間二十万ユーロは惜しくない」

とこれを見ていたあるお友だちが云った。

「二十万ユーロで彼が動くだろうか？」

同じテーブルについていた別のお友だちがいぶかしげに云った。



「動かんだろうね」

と最初のお友だちが云った。

「三十万だって、百万だって動くまい。ああいう旧家の使用人というものは、金のために働いているんじゃないからね」

「まったくだ、いい執事だ。いったいどうしつけたのか知りたいよ」

周りにいたお友だちがみんないつせいにうなずいた。

#### 4 七月二十六日の話

伯爵さまはお目覚めになると、いつもの習慣からまずベッド脇の呼び鈴を鳴らそうと手を伸ばしてひもを探った。ところがいくら探しても見つからないので、ようやく伯爵さまはここが自宅でないことを思い出され、それから執事のコンラート・ヒンケルを呼び出す黒い無粋な機械のことを思い出された。

伯爵さまは身体をぐるっとひねってベッド脇のサイドボードを見た。果たして暗黒物質はそのうえに乗っていた。実に無粋だった。まったくやりきれない光景だ、と伯爵さまは思った。それから、手を伸ばしてそいつの赤いボタンを押した。

執事のコンラート・ヒンケルは稲妻のように電光石火であらわれた。

「おはようございます、伯爵さま。よくお休みになられましたか？」

遠慮がちなノックのあとで入室すると、彼は実に礼儀正しく云った。いつもの決まりきったお仕着せ

を着ていた。

「おはよう、コンラート」

伯爵さまはまだおねむの声で云った。

「きみはまたどうして、ずいぶん早くあらわれたもんだねえ。あのきみの物置部屋からここまで、どんなに急いだって三分かそこらかかるだろうに」

「たまたまお部屋の近くにおりましたので」

執事は寛大な微笑を浮かべ、部屋のカーテンを開けて、伯爵さまへ暖かいタオルを差し出した。伯爵さまはそれを顔へあてがった。それでようやく目が覚めて、執事の差し出したガウンを羽織り、浴室へ行った。バスタブに湯が張られ、室内にはダマスクローズの香りがたちこめていた。お湯加減は完璧だった。いったい執事のヒンケルが、どのようにしてこのような狂いのない神のごとき業をなすのか、伯爵は深く考えないことにしていた。たぶん、執事という連中はすべて、神の遣わした天使かなにかなのだろう。そうにちがいない！ 伯爵さまはしばらく例のお仕着せ姿のコンラート・ヒンケル

へ仰々しい純白の羽根を生やしたり、空を飛ばしたりして楽しんだ。バスタブで楽しくやっていると、朝の紅茶が来た。伯爵はよろこんでこれを受け取った。

「クラウスは今日はどうしたの？」

伯爵さまは執事に訊いた。執事はバスタブの上にある窓に向かって立つており、午前の輝かしい光の中で、あたかも光輪を背負っているかに見えた。

「はい、ご主人さまはただいま、おそらく島を全力疾走していらっしやいますでしょう」

「全力疾走？」

「はい」

執事は微笑を浮かべた。

「探索がてら走ってくる、とおっしゃって一時間半も前になりましたか、お出かけになられました。そろそろお戻りになるかもしれません」

執事の予言は的中した。それから五分とたたないうちに、少佐が運動から汗みずくで帰ってきて、浴室へ乱入してきた。

「マラソンは楽しかった？」

一面ガラスに覆われたシャワースペースで気持ちよさそうにシャワーを浴びる男を伯爵はまぶしそうに、満足そうに眺めた。

「なに？」

少佐はシャワーを止めて聞き返した。

「マラソンは楽しかったか、って訊いたのさ」

少佐は微笑してまたシャワーに戻った。

「運動はいつしてもいい。頭が爽快になる」

全身を流すと少佐はガラス戸を開けて出てきた。日の光に満たされた浴室に、少佐のあらゆる意味で鍛え抜かれた身体がさらけ出された。伯爵は目を細めた。彫像のように美しい、鋼の筋肉。それが少佐の身体を鎧のように覆っている。古代ギリシア人もミケランジェロも同性愛のすばらしさを知っていたので、あのようにはすばらしい彫刻を残すことができたのだ……男の肉体のすばらしさが真にわかるのは男だけだ。まったくいつ見てもすばらしい身体だった。

「きみの運動万能説は聞き飽きてるよ。わたしは島の景色のことを云ったのさ」

伯爵はバスタブの中でくるっと回ってうつぶせになり、浴槽のふちに腕と頭を乗せた。

「観光客がわあわあよろこんで写真を撮りそうな景色が満載の島だ。走りには特に影響せんのだが」

伯爵は大笑いした。それで、浴槽へ腰を下ろして、少佐の頭を拭いてやるために、自分の横へ座るよう指示した。少佐はバスローブを羽織って指示に従った。

「きみも今朝起きたとき、例の暗黒機械でコンラートを呼んだの？」

「呼ばんよ。自分で支度して、あいつに走りに行つてくると伝えようと部屋を出たら、目の前に立つた。で、ご朝食をまだお取りにならないのでしたら、伯爵さまがお目覚めにならない程度にあたりを掃除したいと思えますがよろしいでしょうか、ときた。あいつはたぶん朝の五時前から、なにか仕事をしたくてうろうろしとったんだらう。あわれなやつ

だ！ おれは許可した。おかげでもう居間のほうはちりひとつない。ただいまは布団をばたつかせて寝室を掃除しとるよ、まったく」

エーベルバッハ少佐は肩をすくめた。伯爵はさらに大笑いしながら、タオルを持つ手を動かし続けた。じつとりと濡れた黒髪が、しだいに水気を失ってやわらかくなりはじめた。伯爵さまは世話女房みたい

にこの仕事に熱中した。

「きみはきつと、子どものころは毎日こうやってコンラートに髪を拭いてもらったりしたろうねえ」

「建前上、やつちやいかんことになつとつたがね」  
少佐は云ってから、なつかしように目を細めた。

「おやじの教育方針は、およそ考え得る限りの峻厳さをきわめとつたからな。ガキを甘やかすのは墮落につながるよと云つて、なにをするにも教えたらあとは自分でやれ、だった。それがまた悲しいことにおれにはなかなか効果的だったんだがね。あまり厳しいんで、使用人のほうがおそれをなしとつたよ。執事なんぞ、おやじの目をかいくぐってなんとかし

ておれを助けようといつも身構えとつた。髪を拭くとか着替えるとか歯を磨くとかいうときになると、なぜか必ずそばにおるんだ。で、おそろおそろお手伝いいたしましょうか、とくる」

「きみは手伝いを許可したの？」

伯爵さまはうつとりした調子で訊ねた。小さなクラウス少年が、伯爵さまの頭の中で必死に着替えたり靴ひもを結んだりしようとして奮闘していた。それはかなりほほえましく、いじらしかった。

「ときどきな。それで執事の手が伸びてくるとさつと逃げ出すんだ」

少佐はふてぶてしく微笑し、もう滴の垂れてこない頭を振ってから、立ち上がって浴室を出ていった。

島に残って浜辺でごろごろするか、それとも島をでて観光をするかそれが問題だった。ふたりは朝食の席で、意志決定をコインに任せることで合意した。結果として、浜辺でごろごろするほうが採択された。エーベルバツハ少佐の休暇はおおよそ一週間ばかり

あるということだった。つまり、まだまだ時間はあ  
るわけだった。

伯爵さまは浜辺へ向かう前に、ありとあらゆる形のサンダルを少佐の前へ並べた。それからありとあらゆるたぐいの服をクロゼットから次々に出して、少佐をめんくらわした。伯爵さまの今年のサマーコレクションだということだった。執事のヒンケルがおごそかに後ろに控えていて、騒ぎが落ちついたらすぐさま整理整頓にかかろうと身構えていた。

ふたりは実にすったもんだをしたあげく、少佐が白い清楚なサンダルと、同じく白いチュニツクじみた大振りな上着を採択し、黒いつばの広い帽子が金髪の上へあてがわれて、着替えが終わった。伯爵さまは嬉々として、日焼け止めやサングラスや髪留めやいろんなものを、夏らしいかこのバッグにつっこんだ。そうして執事の鼻先にそれをつきだして、これをもつて一緒に浜辺へ来るようにと脅した。執事はいかなるときにも決して、これをやってからとか、それはあとでとか云わなかった。早くもサンダルを

分類しクローゼットへ入れかけていた執事は、表情ひとつ変えずに、

「かしこまりました」

と云つてかごを受け取った。それから独自にいくつかの品物をかごの中へつけくわえた。

「きみも浜辺スタイルを構築しなくちゃいけないよ、コンラート」

伯爵さまはたしなめるように云った。

「浜辺へ行くのなら、どうしたつてそのお仕着せ以外の服を着なくちゃあ。そんなかつこうでついて来られたんじゃ浜辺気分がだいなしだものねえ」

執事のヒンケルは苦しい顔になった。

「たいへん申し訳ございませんが、わたくしはこの仕事着のほかは寝間着しか持ち合わせがございません」

伯爵さまは口をあんどぐり開けた。

「なんだって、コンラート、きみはいつたいこんな夏のリゾート地へ、仕事着しか持ってこなかったつていうの？」

「はい、必要を感じませんでしたので」

伯爵さまはよろけた。そして少佐に向かつて「この男をどうにかして！」と云った。少佐は顎をさすつて考えこんだ。

「おれは前々から疑問に思っていたんだが」

少佐は疑り深く目を細めて執事を見た。

「おまえはいつたい、私服なんぞというものを持つとるのか？ おれにはその服以外のなにかを身につけたおまえというものは見当もつかん」

「あるにはあるのでございますが」

執事は恥ずかしそうな顔で云った。

「そういったもののへ身を包んでおりますと、実際のところ、なにかこう、落ちつかない気がいたします」

少佐と伯爵は顔を見合わせた。

「予定を変更しよう」

伯爵さまが云った。

「きみはこの部屋へ置いていくよ、コンラート。そしてわたしは服屋を呼ぶよ！ きみは今日の午後めいっばいしかかって、そのお仕着せ以外のリゾートス

タイルを作るんだよ！ わたしたちといっしょに浜辺にも、観光地にも、なんならオペラにだって行けるようにね！ どう、クラウス？」

少佐は考えこんだ。そしてよかろうと云った。これを受けて、執事は非常に心許ない顔つきになった。それから不安げに自分の主人を見やった。主人がふたたび力強くうなずいたので、執事は肩を落として「かしこまりました、お望みとあらばいたしかたがございません」と云った。

「これはいい手だと思うな」

伯爵さまはうれしそうだった。

「わたしはいい服屋を探して呼んでもらうよ。というわけで先に行ってるよ！ ホテルの前の浜辺へ来てね、クラウス！」

伯爵さまは風のように駆けていった。

主人とその従僕は顔を見合わせた。

「ご主人さま、ほんとうにわたくしはリゾート服なるものをあつらえなければなりませんでしょうか？」

執事がおそるおそる云った。

「そのように思われる。あいつが要求しているからには。なんといつてもこの島じゃ、あれが王さまだからな。たぶん、おまえはひと夏の休暇用の服を一式丸ごと、あつらえることになるだろう」

執事のヒンケルは怖気をふるった。少佐は笑いが出てきた。

「たまにはきまじめな勤務態度を改めるのもいいかもしれないぞ」

少佐は笑いながら云った。

「服装が変われば、おまえの気分も変わるかもしれない。実際のところ」

少佐は執事のお仕着せと、すっかり禿げ上がってしまった頭髮、しわの増えてきた顔をまじまじと眺めた。

「おまえはもう何年も、いや何十年も、まともな休暇ひとつとったことがないだろう、違うかね？ おまえが屋敷からいなくなるのはほとんど、親族が死んだか結婚したかというときだけだった。それまた

った一日二日で舞い戻ってくる。いったいおまえは、そういう人生でいいのか？ たまにはねじをまき直したり、油を差したりしないでいいかね？」

少佐は自分があまり云うべきでないことを云っているのに気がついた。だが少佐の舌は止まりそうもなかった。何十年も休まずエーベルバッツ家のために働いてきた、経験豊富な執事のコンラート・ヒンケル！ 彼はもう年老いてきた。昔は確かになかった顔のしわがそれをあかししている。少佐はふいにいま、改めてそのことに気がついたのだった。お仕着せを着ているのが当たり前の執事。いつでもそのあたりにいるのが当たり前の執事。しかし、こんなリゾート地へ彼を引っ張ってきて、なおかつお仕着せを着せ続けるというのは、なにかあまりにも大きなものを無視してはいしまいか？ 彼だつてひとりの人間だ！ たとえいまは暗黒の機械によって呼び出されることに妥協しているにしても、彼は使用人マシンなどではない、決して！

「おまえはほんとうのところ、自分の職場に満足し

ているのか？ ほんとうはもっといろいろと要求したいことがあつたんじゃないのかね？」

少佐はなにかおごそかな気持ちでもってその質問をしたのだが、執事はそんな少佐の意図を汲みとるのでもなく、どちらかといえばしかめっ面に近い顔をした。

「わたくしはそのような質問に対して意見を申し述べる立場にはございません」

質問を跳ね返すような口ぶりだった。そして執事の顔は強情とも云えそうなくらいに、かたくなに引き締まっていた。少佐は自分が拒絶されていると感じ、怒りを覚えた。少佐は誰に冷遇されても気にもとめなかったが、この執事に拒まれるのだけは耐えられなかった。

「いいや、云え、命令だ」

少佐は打ちつけるように鋭く云いはなった。その鋭さが執事に突き刺さるだろうと思った。それを思うとなにかひどく心地よかった。少佐が安心して突き刺すことのできる者は、この地上において執事し



かいないかもしれない。

主従はしばし、にらみあうような格好になった。

こんなことをしたのはいつ以来だろうか？　かつては……ことに少佐が思春期のころには、こういうことをかなりしたような気がする。あのころの執事はまだ豊かな頭髪があり、もっと頬がふっくらしていたのだ。そしてあのころの執事は、クラウス少年を一人前の男にしなければならぬとの使命感から、おのれ自身が盾となり槍となつて、あるときはクラウス少年を守り、あるときは渾身の力でぶつかつてきた。そのクラウス少年の思春期なるものが死に絶えてからの、このおよそ二十年にもわたる歳月によつて、コンラート・ヒンケルからなんと多くのものが失われたことだろう。そしてエーベルバッハ少佐は仕事に追いまくられて、それになんと無関心であつたことか！

執事があきらめたようにため息をついた。彼はうつむき、視線を逸らした。少佐は自分が執事を追いつめているような気がしたのだが、もう引き返すこ

とができなかった。執事がふいに顔を上げた。そうして真正面から少佐を見つめてきたが、もうその表情は落ちついていた。

「わたくしは、使用人……執事としての人生しか送つたことがございませんので、正直に申しまして、そのような質問をされましてもわかりかねます」

執事はきつぱりと云つた。

「わたくしとて、いつでも無我夢中で走り続けてきたなどというわけではございません。お屋敷へ奉公に上がりましてから、まずは仕事に慣れるまで、それから一人前になるまで、ぼっちゃまが生まれますとぼっちゃまが歩けるようになるまでは、ぼっちゃまが学校へお入りになるまでは、ぼっちゃまが卒業なさるまでは、ぼっちゃまが無事陸軍へお入りになるまでは、ぼっちゃまのお仕事がちつくとまでは……それまではどうかここで踏ん張つていようと、そのように、自分なりに区切りというものを考えながらやつてまいりました。しかしさてその区切りに到達しますと、また新しい区切りが見えてまいりま

して、わたくしは次の区切りまでは仕事に打ちこもうと思うのでございます。そうして結局この執事はもうこんな年寄りでございます。いったい、わたくしにどうすればよかったとおっしゃるのでしょうか。わたくしは別のやりかたを存じません。現代のひとたちは、なにか節目節目に立ち止まって考えるようなことをなさるようですが、わたくしは旧弊な人間でございます。わたくしどもは一度決めた生き方を變更するようなことは教わってまいりませんでした。立ち止まって考えたりなどすれば、こうすればよかった、ああすればよかったなどというものは、誰しもうじゃうじゃといくらも出てくるものでございます。わたくしにいまさら、そのような問いかけをなさるのは少々残酷に過ぎるというものでございます」

執事は射抜くような目で少佐を見ていた。執事の見目は半ば怒りのために燃えていた。そうだった。そうだったのだ。エーベルバッハ少佐は後悔し、打ちのめされたような気持ちになった。いったいおれはな

んと残酷な仕打ちを、この男にしたことか。勢いはいえ、決してのぞいてはならないものを、それを見てしまえば引きずりこまれとらわれてしまわざるを得ない、あの「もしも」という名の暗く際限ない裂け目を、自分はこの男へつきつけてしまったのだ。何十年ものあいだ、執事としての人生にひたすら邁進してきたこの忠実な男に對して。少佐がいま質したことは……自分の執事への扱いの是非を執事に質すということは……ほとんどこの男の忠誠に對する冒瀆だった。

「すまん、その通りだ。おれが悪かった。失言だった」

少佐は云った。彼は誠意をこめて、しかし幾分氣後れたように、執事の見慣れた八の字ひげのついた顔を見つめた。執事に謝るときにはいつもそうだった。いったいどうしたら自分の謝罪と誠意が伝わるものか、執事の自分に対するあまりにも大きな愛情と寛大さの前に途方に暮れながら、少佐は……クラウス少年は、いつも執事へ許しを乞うていたのだ

った。執事があまりに優しく主人思いなために、ただ謝りさえすれば、自分の誠意などなくても許されてしまうのではないかと、半ばおそれながら。

「二度と云わん。許してくれ」

執事は瞬時、泣きそうになったように見えた……しかし、彼はすぐに表情を引き締め、それからいつもの微笑を浮かべた。

「おわかりいただけましたならば、うれしゅうございます」

執事は静かに云った……そうして、少佐へ静かに頭を下げた。

伯爵さまはドウブロヴニクの街から、わけても高級な店の店員をホテルへ呼びつける算段を整えて、浜辺へ上機嫌で降りていった。浜辺には何人かのお友だちが来ていて、それぞれに太陽に焼かれながら、椅子の上へ転がって新聞を読んだり、砂浜の上に寝そべったりしていた。伯爵がそばを通ると、みんなにこやかに挨拶をしてきた。ホテルのボーイがひと

りひまそうにつつ立っていて、なにか用はないかとあたりを見回していた。伯爵は具合のよさそうな場所を選んで、ボーイを呼んで椅子をふたつとパラソルを注文した。ボーイはかしこまりました、と云ってホテルへ飛んで返した。

ボーイが注文のものを設置してしばらくすると、少佐がやってきた。

「遅かったねえ！」

伯爵さまは甘えるように云って少佐へすり寄った。そうしてすぐに、なにかはつとしたような顔で少し身を引いた。少佐にはどこか固い、照れたような、とまどっているような気配があった。なにかあったのだ！ でも少佐はそれを押し隠そうとしているようだ。伯爵さまは疑問を押し殺して微笑した。そうしてまた少佐へすり寄っていった。

「きみが来ないと背中へ日焼け止めを塗れないんで待ってたんだよ」

伯爵はびよんびよん飛び跳ねて云った。  
「赤ぶくれになるのはいやだもの！」

そうして伯爵が服を脱ぎだすと、少佐は微笑して、いつもの少佐にもどった。

伯爵は手の届かないところへ日焼け止めを塗ってもらった。それから少佐を裸に剥いて転がして、全身へ丁寧に日焼け止めを塗ってやった。そうしてふたりして寝転がり、存分に太陽にあぶられた。ふたりはときどき海へ出て遊んだ。うんと遠くまでふたりして泳いだり、少佐がジョーズ並みに伯爵を追っかけまわしたりした。それから浜へ上がると身体を拭いて、また律儀に日焼け止めの塗りっこをした。伯爵さまはときどきすぐったそうに笑った。それから伯爵さまが少佐を砂の中へ埋めるために、墓掘り人のように働いて、大きな穴を掘って少佐を押しこんだりした。

浜辺にいたお友だちは、ふたりを見て微笑んだ。伯爵を追っかけてきて遠巻きに見守っていた若い連中は、少佐がうらやましくて歯噛みしたり悲しんだりした。それでみんなしてなぐさめあい、しまいは自分たちも同じようなことをやって、けっこう楽

しんだ。

存分に遊んで部屋へ戻ると、ソファの前で執事のヒンケルが……否！ 彼は執事でなかった！ ヒンケルは涼しげな半ズボンをはいて、青いストライプの半袖シャツを着ていたのだ！ 彼の横では、どことなくいかがわしげな、ぼっちゃりした中年の店員が、満足そうにうなずいていた。

「やあ、コンラート！ きみのファッションショーに間に合ったんだね、わたしたち」

「もうこれが最後の一着です、これで試着は終わります。この紳士の今年の夏はこれで完璧ですよ、お客さまがた」

店員が顎を三重にして満足げにうなずいた。

「買うものを見せて」

伯爵さまは専門家らしく落ちついた態度でソファに座って、云った。店員がよごさんず、と云って、合計四つにわたるスーツケースの中から次々に服を取り出してよこした。半袖の柄のシャツ、無地の色

違いのシャツ、ポロシャツ、半ズボンに長ズボン、ジャケットさまざま、いろんな色の靴下、TシャツにYシャツ、ベルトとズボン吊り、サンダルや革靴、水着、パナマ帽や中折れ帽などが手品みたいにずるというくらも出てきた。

「これが全部必要なのか？」

少佐はあつけにとられて云った。なぜといつて、主人たる少佐だつてこんなにたくさん服は持つていなかったからだ。太めの店員はたしなめるような微笑を投げてよこした。

「お客さま、いまだき、この程度のものは、はい、お年に関係なく、おしやれをする場合には必要になるのでして。しかもどれも流行にとらわれず着回せるものばかりでございますよ。紳士といえますものは、場合によつては婦人よりもたくさんものを要する場合もございますから」

「それは確かにそうだよ」

ものもちの伯爵さまがうなずいた。

「よし、全部置いていつてもらうよ。きみの選択は

理にかなっている。はじめておしやれをするんなら、これくらいそろえるのは当たり前さ……明細をくれるね？ 出張費や経費をちゃんと含めてね……」

伯爵さまは太っ腹にカードで一括払いをした。あとでジェイムズくんが引き落としの明細を見たら、きつと泡を吹いて倒れるだろう。店員は大口の取引にほくほく顔で帰つて行つた。執事のヒンケルはまだ半ズボンとシャツ姿で立たされていた。彼はなんとも気まずそうだった。

「おまえの半ズボン姿なんぞ拝めるとは思いもよらなかった」

少佐は正直に云つた。ズボンの下からのぞく執事の脚は、想像よりずっと細く、なにか頼りなげに見える。

「わたくし、半ズボンなど履くのは半世紀ぶりでございます」

執事はとまどつていた。

「どうも脚がすーすーしまして、具合が悪うございます……仕事着に着替えてもよろしいでしょう

か？」

執事は訴えるような目で伯爵を見やった。伯爵はふうん、と鼻を鳴らして、それから寛大にもいいだろうと云った。

「明日から少しずつ、きみの私服姿を楽しむことにするよ。わたしが毎日服を選んで着せてあげるからね！ 楽しみにしているんだよ！」

おそれいます、と執事は云った。なんたる従順な、忍耐力のある男！

5 七月二十七日の話

朝食の席で、またぞろ彼らは本日いったいどのよう  
に過ごすかという議論を戦わした。伯爵さまの意  
見では、あの殺風景なコンサート・シンケルの穴ぐ  
らへ、早急に文化的な香りを導入しなければならぬ  
とのことだった。少佐は別段反対はしなかったが、  
一応執事へ意見を聞くために、デザートの給仕にや  
つてきたところを捕まえた。

「そういうわけだ、おまえの意見はどうだ」

執事は伯爵さまの前へフルーツの載った皿を置き、  
食後の紅茶を煎れてから、さようでございますね、  
と云った。

「わたしといたしましては、以前にも申し上げま  
したようにあの部屋に満足しておりますが……」

「あんなもので満足するなんて、きみの文化的教養  
を疑うよ」

伯爵さまはあくまで文明的文化的最低限度の生活  
へこだわる姿勢を見せた。

「きみは今日はわたしたちといっしょに街へ繰り出  
して、買い物をする必要はないんだ」

執事はかすかに困ったような顔で少佐の前へコー  
ヒーカップを置いた。

「お望みとあらば、いたしかたがございません」  
執事は云った。

「街とやらへお供いたします」

それで、伯爵さまは食事がすんで部屋へ引き上げ  
るとすぐに、執事を例の暗黒物質によって呼びつけ  
た。

「さあ、きみはその重苦しいお仕着せを脱いで、わ  
たしたち一味に加わるために着替えるんだよ」

伯爵さまは嬉々として、クローゼットへ隠しこん  
でいたシンケル用の服を出してきた。

「どれにしようかな。このシャツはちょっと地味だ  
な……今日も暑くなりそうだから、丈の長いズボン  
はやめよう」

執事は檻の中へ捕まった動物のようなあわれな目  
でおのが主人を見やった。主人はしかし、あきらめ

ろというように首を振るばかりだった。執事はため息をついた。彼は見ていて気の毒になるくらい気落ちしていた。

「よし、決まり！ さあ、コンラート、奥の化粧室へ行つて、これに着替えておいで！ それから忘れずにわたしの着替えを手伝うんだよ、いいね」

執事は消沈した声でかしこまりました、と云つて、ドアの奥へ消えた。見ているほうでかわいそうになつてくるようだった。あわれなコンラート・ヒンケルは五分あまりもしてから出てきた。彼は夏の紳士になつていた。七分丈の紺ズボンに、腕の折り返しが柄になつた白シャツを着て、パナマ帽をかぶつていた。足下はしっかりとしたサンダルだった。

「テーマは堅苦しくないコンラート・ヒンケルさ」

伯爵は笑いながら云つた。執事は着慣れたお仕着せを剥奪されてしまったので、おのれが無力化してしまつたという気がしていた。そしてどうしたらいいかわからないで、戸惑いながらつつ立っていた。伯爵さまは微笑んで、執事へ近づいていつて背中へ

手を回し、くるくるとダンスを踊りだした。

「きみはとってもすてきな紳士になつたよ。自信を持つんだよ！ なんだかきみに恋することもできそうだねえ。どこかのレストランかカフェでわたしを待つていて、声をかけてほしいな……失礼ですが、お隣はあいておりますか、つて云つてね。そうして、わたしがきみを見て、微笑んでうなずくと、きみはわたしの隣へ移動してきて、わたしに飲み物をおごつてくれて、楽しい会話をしてくれるんだ。わたしがなにか食べたいと云うと、きみはさつと手をあげて店員を呼ぶのさ……」

伯爵さまはうつとりと云つた。こいつはもしや目新しい、スマートな年上のおやじに飢えているのだからかと少佐は考えた。なんだかありそうなことだった。そして執事を仮想の年上の恋人にして連れ歩くというのにもかにも彼のやりそうなことだった。少佐はなんだか空恐ろしい気がして、気づかれないよう小さくぶるぶると頭をふつた。それから自分も着替えに行った。



三人男はドウブロヴニク旧市街へ繰り出した。

街をびつしりと城壁に囲まれたこの城塞都市は、白い大理石でできた城壁とオレンジの屋根と、青い海と空の対比の見事さが、やはりなにかひどくギリシア的なものを思わせる。「アドリア海の真珠」なる優美な名称は、冴え冴えとした海に浮かぶこの白い大理石の街並みによるのだが、はつきりとした日差しと明晰な色の対比は、古代ギリシア人たちが日々暮らしていた環境とそう遠くないにちがいない。古くギリシアの植民活動からはじまり、ローマ帝国を経て、ダルマツィア地方は以後ビザンツ帝国、ハンガリー、ベネツィア、ハプスブルク帝国、オスマン帝国に順繰りに支配されそれぞれの文化を吸収してゆくことになるが、このドウブロヴニクという都市だけは、海上貿易の豊富な利益を盾に、無法者のナポレオンによって陥落させられるまで終始一貫して独立自治を守り続けた。

城壁に囲まれたドウブロヴニク旧市街は、目抜き

通りであるブラツア通りを中心に、細い路地が張り巡らされている。街の背後にそびえるスルジ山に向かって、ランタンのいくつもぶら下がった裏路地は一部などらかな傾斜を描き、なにか不思議な場所へ迷いこむような心地がする。街の中には教会と土産物屋、飲食店などが櫛比し、シーズンには観光客でごったがえしている。

三人男たちはボロボロンテの手下が操るボートによってドウブロヴニクへのりつけると、さっそくに旧市街を歩き回った。伯爵さまはクロアチア刺繍の壁かけやクツシヨンカバー、ベッドリネン、カーテン、履き心地のよいスリッパ、民芸品のルームランプや燭台のような雑貨品、絨毯、花瓶、花などをわき目もふらず次々に買いこんだ。そして次から次にそれを自分に従うふたりの男におつつけてよこした。少佐と執事はふたりして伯爵さまの下男かなにかのようだった。コンラート・ヒンケルがせっかくおしやれな外出着に身を包んでいるというのに、これではお仕着せを着ているのとかわりなかった。実際、

ヒンケルはパナマ帽がじゃまだったし、慣れた靴でないのも足もとがなにかおぼつかなかった。彼は黙々と荷物を担いで伯爵さまのあとへ従いながら、もう二度とお仕着せ以外の服を着まいと岩のように固く決心していた。どうせなにを着ても自分は使用人なのだから！

執事がこのようにひそかに腹を立てているあいだに、伯爵さまは天地創造の神のようにおのれのなしたことの結果にとつくりと満足され、七日目の休息を所望なさった。少佐も執事も両手に大きな袋をいくつもぶら下げていて、暑いので汗をかいていた。そしてふたりともむつつりと黙りこんでもものも云わなかった。

「いや、休憩の前に一度港へ引き返そう。それからゆつくりと休憩をしようよ」

伯爵さまは無慈悲に云いはなち、ふたりの従僕をげっそりさせながら、ドウブロヴニク湾へ引き返していった。従僕どもは顔を見合わせ、お互いの荷物を見やって、あきらかに相手のほうが軽そうだとい

う感情を互いに持った。そうして互いに不満を抱きあった。彼らは普段の主従関係を浅ましくも忘れはてたかのようなだった。実際彼らはいま、対等なのだ。お仕着せを着ないコンラート・ヒンケルと、普段着のエーベルバツハ少佐。

港へ戻ると、伯爵さまは相変わらず暑苦しい黒スーツ姿のボロボロンテの手下を呼びつけて、これらの荷物をポートへ積み、ホテルへ持って帰っておくようにと申しつけた。ボロボロンテの手下は「へい、かしこまりました」と涼しい顔で云ったが、内心では荷物の量を見てすでにやる気をなくしていた。彼はいやなことはとつととすませるたちだったので、素早く荷物を運び入れにかかった。

伯爵さまは満足され、うなずいて、彼に背を向けると、少佐の腕をとって歩き出した。少佐はようやく荷物持ちから昇格したわけだ……二、三歩行つてから、伯爵さまはふと思いついたように立ち止まって、後ろをついてくるコンラート・ヒンケルの腕にも手をかけて、三人一列になつてにこにこ歩き出

した。すると、コンラート・ヒンケルもまた、荷物持ちから昇格したのに違いない！ ヒンケルははじめの経験にどきまぎしながら歩いていった。

荷物を運んでいたボロボロの手下は、引きずられていく執事のヒンケルをあわれそうに見やつた……かわいそうに！ あんないつもと違う格好では、自分で自分をどうしたらいいかわからなくなるに決まっている！ 少なくとも、この手下は仕事着である黒スーツ姿をたもっていられるだけ、はるかにましであつた。

伯爵さまは男ふたりをずると引きずつて、繁盛している海っぱたのカフェへ入った。海側へ張り出したテラス席から、エメラルドグリーンのアドリア海を眺め渡せた。三人男はそこへ落ち着いた。ヒンケルは主人たちと同席して、すっかり恐縮していた。伯爵さまはこれを見て、笑いながら少佐を見やつた。そうして少佐へなにかささやいた。少佐は肩をすくめてこれを受け止めると、ヒンケルへ向かつ

てメニューを差し出してきた。

「おまえから決めるんだ」

少佐は云つた。ヒンケルはぎょつとして、めっそうもございません、と云い、メニューをつき返したが、つき返された。

「ただいまから、年功序列が主従関係より優先されることとする」

少佐はにやにや笑いながら云つた。伯爵は少佐の肩によつかがかつて、くすくす笑いをしていた。

「平服のおまえじゃあ、執事扱いをするわけにもいかんだろうからな。第一、そんなことはやりにくい」

「きみはいまから、わたしたちの年上の友人コンラート・ヒンケルになるのさ」

伯爵さまはうつとりとほほえんで年長の友人ヒンケルを見やつた。

「年長の友人なんだから、きみはそれらしくしていただくやあいけないよ。年長者の威厳と寛大さを見せなくちゃねえ。だからまずは、きみから先になにを頼むか決めたまえよ」

「はあ……」

ヒンケルは困惑の体で、ふたりをかわるがわる見やった。

「ぜひともそうしなければなりませんでしょうか？」

「ぜひともそうしなくちゃいけない」

伯爵さまはうなずいて云った。ヒンケルはしよことなしにメニューを見やった。

「よろしければわたくし、コーヒーを一杯いただきとうございます」

「きみはおながすかないの？」

伯爵さまがからかうような声で云った。

「はあ、まあ小腹がすいているといえはすいているような……」

「じれったいねえ」

伯爵さまはヒンケルの手からメニューをひったくった。そうしてしばらく見やってから、メニューから顔を上げ、まじまじとヒンケルを見つめた。

「いま、わたしはとても大変なことに気がついたん

だ」

伯爵さまはそれから少佐を見やった。

「コンラートはわたしの食べ物の好みについて一切合切を知ってるけど、わたしはコンラートの食べ物の好みについて、いっさい知らないんだ。これはいったいどうしたわけなの？ きみならコンラートの好みについて知ってるだろうね？」

伯爵さまは呆然として少佐へメニューを渡した。

少佐は難しい顔をした。そうしてじっと考えこんだ。

「……知らんな、おれも」

ヒンケルが勝ち誇ったような顔になった。

「そら、ごらんなさい」

彼はうれしそうな顔で、メニューを取り返した。

それからウェイターを呼びつけ、

「こちらの方に、砂糖なしのアイスティーと、オレンジとチョコレートとくるみのクレープを、こちらの方にはサーデインのサンドイッチとコーヒーを、わたくしはスモークハムのサンドイッチとコーヒーをお願いします。それから、あとでガス入りの水を」

ウェイターはにこやかにほほえんで、かしこまりました、と云つて下がつていった。少佐と伯爵は顔を見合わせた。

「わたくしをからかいますと、こうでございますよ」  
ヒンケルが得意満面で云つた。

「わたくしを手玉に取ろうなど、むだでございます。第一経験というものがまるで違いますのでございますから」

「恐れ入りましたでございます」

少佐と伯爵が降伏して、頭を下げた。

三人男は楽しく食べかつ飲んだあと、伯爵さまの案内で、最後の買ひものとやらにつきあうことになった。伯爵さまは旧市街を自分の庭かなにかのようにするすると歩いていって、ランタンの並ぶ路地裏にある小さなアパートの前にたどりつくつと、外階段を登つていった。ふたりの男はそれについていった。階段のつきあたりにごく短く細い廊下があつて、左右にドアがひとつずつ並んでいた。どちらにも看板

や表札のようなものはかかつていなかった。

伯爵さまは左のドアをためらいもなくノックした。しばらくして、ごく細くドアが開けられた。誰かが客の様子を探っているらしかった。それからドアが三人の前に大きく開かれた。ドアの前に、派手な赤いチョッキを着た、黒っぽい髪を持つ小太りの中年男が立つていた。

「お久しぶりです、伯爵。わざわざご連絡をいただいて、ありがとうございます。待ちかねていましたよ」

伯爵は慣れた調子で男と挨拶を交わし、うしろのふたりをうながして中へ入つていった。

部屋の中は外観とはうってかわつて、重厚な調度品で満たされていた。金のはりめぐらされた天井から黄金のシャンデリアがぶら下がっており、深紅の果てしなく毛足の長い絨毯に覆われた床の上に、豪華な刺繍のほどこされた布張りのソファと猫足のテーブルが置かれ、部屋の奥にどっしりした執務用の机と椅子、書類棚が置かれていた。その先に、さら

に奥へ続くドアがあった。

伯爵は中年男に示されてソファへ腰を下ろした。

少佐と執事も従った。中年男はいったん奥のドアの向こうへ消えてから、お茶のセットを乗せたお盆を手に戻ってきた。そうして三人へお茶を給仕した。

「彼は画商なんだ。看板を出して商売なんかはしてないけどな」

男は少佐と執事のふたりへ名刺を差し出してよこした。上質な象牙色のカードに赤銅色で「ペルコヴィチ&ルジチカ商会 トミスラフ・ルジチカ」と書いてあった。

「ルジチカと申します。伯爵には長年ごひいきにしていたいております」

男は丁寧に新参者のふたりへ挨拶してよこした。

「本日は、なにか寝室へかけておくような絵を、というご希望でございましたね？」

「そうなんだ」

伯爵はおいしそうにお茶を飲み、いかにも慣れたように話を進めた。

「一日の仕事に疲れきった男を想像してほしいんだ。あわただしい、神経をすり減らすような仕事に熱心に取り組んで、身も心もつかれはててようやく寝室へたどり着いたひとりの男をだよ。そういう男の寝室へかけておくにふさわしい一枚を探しているんだ。主張のない、ゆったりした絵で、それでもその一枚があることでなにか部屋全体が落ちついてあたたかい感じになるような絵をねえ。部屋の大きさは、さうだな、この部屋の入り口から、ここまでくらいだったかな？」

伯爵は手で部屋の大きさを示すと、執事へきちんと目配せしてよこした。

トミスラフ・ルジチカ氏は考えこんだ。

「下級労働者ではございますまいね？ あなたさまのご注文でございますから」

「違うよ。その男が従事するのは、工場の作業みたいな仕事じゃあなくて、もっと知的なものさ」

ルジチカ氏はなおも考え、それからふいに立ち上がった。玄関ドアをあけて出て行った。そして五分

ほどで戻ってきた。

「こちらなにかがございましょう？ クロアチアへいらしたのですから、せっかくならナイーブアートなどお買い求めになつてみては？」

彼は一枚の絵を抱えていた。薄くつもった雪の中を、四人の少年たちが駆け回っている絵だった。田舎の村らしく、少年たちは森を抜けて、村の入り口へ出てきたところらしかった。ぽつぽつと立ち並ぶ屋根の先に、教会の尖塔が見える。少年たちの足もとに雑種の犬が一匹くっついていて、身体をくねらせ、楽しげに走っていた。少年たちは思い思いの格好をしていた。いろんな色の毛糸の帽子をかぶり、手袋をしたり襟巻きを巻いたり、お下がりなのかぶかぶかのコートを着ていたり、古びた頑丈そうな革靴を履いていたり長靴だったりした。一番年長らしい少年が三人をせかすように振り向いている。あと三人はお互いの顔を見ながら楽しげに走っている。「伯爵はご存じと思いますが、ナイーブアートとい

いますのは、農民が冬のあいだに作る民芸品の一種

とても申しましょうか。農村の祭りや収穫や、彼らの日々接している風景を描きます。クロアチアも内陸部の山沿いは冬の寒さが厳しいものですから、このような雪の光景も見られます。身近な材料で作られたはじめたものですから、このようにキャンバスのかわりにガラスを使つて、その上へ油絵の具で描いてゆくのがほとんどです。画家としての教育を受けた者が描いているわけではありませんので、描写には少なからずあやふやな点が多いのですが、眺めていますと、誰しも胸に秘めている憧憬というようなものへ、素直に染みこんでゆくような感じを持つていると思います」

ルジチカ氏はもう一度絵をまじまじと眺め、微笑して続けた。

「最近ではアーティスト意識のようなものを持って、やたらに凝ったものを描いているのもおりますが、わたし個人としてはそれはもう違うと思いますね。この絵を描いたのは共同経営者の親戚筋の男ですが、もともと絵に関心のあった人間で、独学ですが確か

な腕がありますし、なにより、よい目とよい心根とを持ってるのがわかります」

にぶい日差しの中で、少年たちは駆けっこに夢中になっていくようだった。それぞれの顔が判別できるほどには細かくなく、けれどもそのおおまかな個性くらいはわかるような筆はこびで描かれた、四人の少年たち……年齢はたぶん十二、三かそこらだろう……は笑い声をあげ、ときどき足をもつれさせながら、吠えながらついてくる犬とともに走っているのだ。彼らの走る雪のつもった景色は執事に、故郷アイフェル地方の田舎村を思い起こさせた。少年コンラートも、きょうだいや仲良しの少年たちとともに、こうやって雨の日も雪の日も走り回り、転がり回ったものだった。近くの森が彼らの遊び場で、そこでたっぷりと遊んでは、教会の鐘の鳴るのを合図にこうやって大急ぎで村へ帰ったのだ。彼らの仲間の中にも、いつも決まって犬が加わっていた。誰かの飼っているのだったり、親に内緒でこっそりえさをやっている野良犬だったりした。

「最近の子どもたちがこんなふうには外を駆け回って遊ぶものかどうか知りませんが、わたしの子ども時代はそうでしたね。思い出しますよ」

ルジチカ氏がなつかしむような顔をした。

「そうなの？ コンラート」

伯爵さまが訊ねた。執事ははい、とうなずいた。故郷の小さな村で毎日繰り広げた数々の遊びのことが、次々に思い出された。彼らはさんざん遊び回り、自然を相手に傍若無人なふるまいに及んだあとには、いつもまるで自分たちが天下を取ったような気持ちで帰路についたのだった……

「これをもらうよ」

伯爵さまはしばらく執事を優しく見守っていたが、ルジチカ氏へ向き直ってそう云った。執事の主人たるエーベルバッハ少佐は、これを見ながら執事の故郷へ執事を追跡していったときのことを思い出していた。あの自分と同じ名前を持つ、なかなか見どころのある少年についても。



その日のうちに、コンラート・ヒンケルの穴ぐらは、少佐と伯爵の手によって、絨毯とベッドリネン一式とクッションと花瓶と花、ルームランプ、カーテン、それに例の絵などで飾られた。彼の部屋は一挙に、簡潔ながらあたたかく人間らしい文化的な香りを放つようになって、もう穴ぐらなどとは呼べないものになった。執事のヒンケルは感動でものも云えなかった。彼はこんなにしてもらういわれはないと思った。彼は感動のあまりにもできないで、ただ呆然とつつ立っておのれの部屋を眺め回しているばかりだった。ひとり感激している執事へ、今日はもう休むように云い置いて、少佐と伯爵は部屋を出た。彼らはこれからまた街へ引き返して、レストランで食事をするのだ。

ひとりになったヒンケルは、テーブルへ歩み寄り、テーブルの上に置かれた花瓶と、そこへ生けられた名も知らぬ白と赤紫の花を見つめた。赤紫の花は、ろうそくのやわらかい明かりに照らされて絹糸のようなめしべをのびし、自分の存在を主張していた。

花は温かく、あたりの空気を包みこむように花瓶の中で咲いていた。自分以外の生きものが、自分の部屋でこうして生きている。ヒンケルは不思議だった。彼は花の香りをかいだ。かすかに甘い、からかうような香りが鼻先へ残った。ヒンケルは微笑した。彼は胸がいっぱいになり、自分の穴ぐらをまじまじと眺めた。彼は満足だった。彼は世界一幸福な使用人だった。いつものように聖書を読んでから、これまでの数かぎりない気苦労と幸せを思い返しつつ、ヒンケルは眠りについた。

「……いいですか、ヒンケル、おまえはまだ経験が浅く、わからないことも多いというのはわかっていきます。わたくしは完璧にしろなどと云っているのです」  
「ありませんよ。最善を尽くせと云っているのです」  
執事見習いの少年コンラート・ヒンケルは、この日手ひどい失敗をやらかした。彼は執事からことづかった用件……午後三時に来客あり……をご主人さまへ伝え忘れ、彼の主人にとんだ恥をかかせてしま

った。そうして主人と執事から大目玉をくらったあと、案の定シャルロット大奥さまからもお小言を頂戴するはめになっていた。ヒンケルはお屋敷へつとめだしてまだ日が浅かった。右も左もわからぬという時期はなんとか過ぎたが、このあまりにも部屋の多い、あまりにも旧式な、あまりにも一般の家と勝手の違う屋敷の中では、ヒンケルは迷ってしまったような気がするがよくあった。彼はときどき：否、非常に頻繁に、おそろしく心細い気持ちがあった。そうしてそう思う自分を恥じ、なんとか気を奮い立たせて、早く一人前になると仕事に励むのであったが、道は果てしなく遠そうだった。ヒンケルはほぼ毎日なにか小言を食らうようなことをやらかった。彼は、なにひとつろくにこなせない、判断力のない青二才だった。

「申し訳ございません、大奥さま。わたくしがもっと、注意深くあれば……」

ヒンケルは自分の失敗と叱責とで、もう疲れ切っていた。彼は確かに猛省していたが、恥と屈辱とで

半ばふてくされていたのも事実だった。つい先日まで、誰もが知り合いの小さな村で、親しいひとたちにかこまれて生きてきたヒンケル少年は、自分で望んだこととはいえ、突然職場という大人の世界へ放りこまれて、親からも云われたことのないようなことをやいやい云われ、腹立たしいやら、やるせないやらで、もう爆発寸前なのだった。彼はいけないと思いつながら、ついついむくれたようになる自分の顔を自分でどうにもできなかった。口のききかたも、いけないと思いつながらもぶっきらぼうな、とげとげしいものになってしまっていた。

大奥さまは、ヒンケルのことばを受けて彼をぎろりとにらみつけた。大奥さまのにらみはおそろしかった。心の奥底まで射抜かれるような、きつくきびしい視線が、逃げ場のないところへ自分を追いこむような心地がするのだった。ヒンケルはしかし、今日はそれにも疲れと、いらだちを感じた。たしかに自分が悪かったのだ、だけど、こんな新人の自分を、こんなふうにならなくても責め続けなければ……彼

はふてくされてうつむいた。

「ヒンケル、おまえのその反省のしかたは、悪いけれどとんと見当違いね」

ヒンケルは思いがけないことを云われて、はっと伏せていた顔を上げ、大奥さまを見つめた。大奥さまはソファへ腰を下ろしていた。彼女は痩せぎすで、背が高かった。それが、なにかそびえたつような不思議な威圧感をもって存在していた。はつきり云つて、大奥さまはあまりにきびしく、あまりに威圧的で、ヒンケルは苦手だった。だが大奥さまがため息をついて、かすかな苦笑を浮かべたとき、ヒンケルはおや、と思った。彼ははじめて、おそろしいものでないなにかを、大奥さまの鋭い青緑の目の中に見出したのである。

「おまえの上司や主人が、おまえになんと云つたか、それは知りません」

大奥さまの声は、なにかこれまでにない柔らかみを帯びていた。

「たぶんおまえは、もっと注意深く確実に仕事をこ

なすよう努力しろと云われたのでしょうか？ それはね、いつまでもそんな子どもっぽいみじめな顔でふてくされていないで、そのためにどんな手を打てるか、頭を使い工夫なさいという意味ですよ。おまえはいまきつと、悔しいでしょう。情けないでしょう。腹も立っているでしょう。自分の評価を落としていると、おそれでもいるでしょう。不慣れな中で、毎日張りつめて右往左往しているはずですよ。ただね、ヒンケル、そんなことは、わたくしたちは皆承知の上なのよ。一人前になるには、どうしたってそういう目に遭わないではすまないものなの。そういう状況から、頭を使い、這い上がってくることでできる人間だけが、一人前になれるのですよ」

大奥さまは微笑を深め、ソファにぐっともたれた。「だけど履き違えてはいけませんよ。たいていの人間は、なにか失敗すると今度こそ完璧になどと考えるけど、それは不遜な、間違つた考えです。完璧な人間などいません。わたくしたちはそんなことを使用人に求めはしません。不完全なことを自覚して、

いかにやっていくかということを考えるように求めているだけ。自分をよく研究して、どうしたらよりよくできるだろうか、いろいろ実験してみるのです。結果はすぐには出ません。でもわたくしたちは、一度おまえを雇ったからには、おまえが泥棒でもないかぎり、おいそれと見限って追い出すようなことはしません。だから、やれるだけのことをやってごらんなさい。難しいことがあれば、執事に相談して、助言を仰ぎなさい。助けを求めることは決して、恥でも敗北でもありません。むしろそうすること、執事はおまえが理解できるようにするし、おまえをどう扱えばいいか学ぶでしょう。周りに働きかけて自分のやりやすいように環境を整備していくのも大切なことのひとつなのよ。いずれおまえもそういうことがわかってきて、こんな失敗を二度としないようになるはずです。さあ、もう今日は仕事をやめて、街へ行って、このお金で気の晴れることをなさい。そして今日の失敗のことをよく考えて、それからお忘れなさい！　いいわね？」

大奥さまはヒンケルの手に、紙幣を何枚か握らせました。ヒンケルはもう、どうしたらいいかまるでわからなくなりました。彼は思いがけないことばと、思いがけない優しさ、思いがけない小遣いと、思いがけない休みをいっぺんに与えられて、困惑した。彼にはこんな氣遣いははじめてだった。こんな思いやりははじめてだった。こんな優しさといったわりは、彼には経験がなかった。それはなにか規律のある、厳格な、しかし深いいたわりだった。ヒンケルはこのような大きな期待と信頼を受けたことはなかった。このように自分を受け止められたことがなかった。彼ははじめて、ひとりの人間として扱われるのがどういうことかを、それをどう受け止めるべきなのを知った。彼はトビトのように、目から黒い膜がはがれ落ちたように感じた。見えていなかったものが、急に鮮明に見えるはじめた気がした。なんだ、そういうことだったのか！　彼は身体中のこわばりがとれたように感じた。こっぴどく扱われてたわけじゃないんだ。なあんだ！　彼は気持ちしが晴れ、自分が

途方もない愛情に包まれているように感じた。

ヒンケルはまごころをこめて大奥さまを見やった。彼女の柔らかさと優しさは、もう消えていた。彼女はいつものきびしい顔に戻っていて、わかっているというふうに、あるいは行きなさいというようにならずいた。ヒンケルはべこんと頭を下げて、急いで部屋を出ていった。自分の部屋へ駆けこみ、それから大奥さまの云いつけに従って、街へ出た。

その翌日から、ふてくされたり泣きそうな顔でうじうじやっているヒンケルは、もうどこにも見あたらなくなつた。彼は自分が一步一人前の男に近づいたと感じた。彼は相変わらず毎日なにかしら小言を云われ、ひどい失敗もした。でももう、そんなことはなんでもなかった。彼は信頼されている使用人であり、成長を待望されている執事見習いだった。彼はなにをなすべきかを知る人間に生まれ変わったのだ。……

……執事のヒンケルは目を覚ました。まだ午前三時すぎだった。彼のまぶたの裏に、大奥さまの顔が

ちらついていた。執事は目を閉じて、その顔をしばらく思い浮かべた。苦しい修業時代だった！ しかしあれがあるからこそ、いまのこの天下無敵の鬼執事ヒンケルがあるのだ。

彼はベッドへ転がったまま、窓からぼんやり差しこむ月明かりの中で、おのが穴ぐらを見つめた。波の音がかすかに、絶え間なくしていた。彼は幸福だった。ボンにしようといまいと、いかなる事態が出来しよう、思いやりある主人に恵まれたエーベルバッハ家使用人コンラート・ヒンケルであるかぎり、幸福であった。

## 6 七月二十七日之夜と誕生日当日の話

執事を部屋へ置き去りにしたあと、ふたりは夕食のために着替えた。旧市街の海を眺め渡せるレストランを予約してあった。伯爵さまはすばらしい青のドレスを着て、髪をまとめて折りたたんで、髪留めでとめた。そうして首と耳に、グローリア家伝来の真珠の首飾りと耳飾りをぶら下げた。これはあんまりすばらしいので、グローリア家の女性たちは代々、ひと前ではまがいをつけていたのだった。伯爵はそんなことはしなかった。彼は自分にはまがいものなど似合わないのがわかっていたからだ。

伯爵がそういう服を着て、肩から手編みの途方もないレースのショールを羽織って珊瑚のバッグを持つと、少佐のありきたりな男性式正装はすっかりできあがっていて、なお煙草を一本吸うだけの時間が余ったのだった。

ふたりがボートへ乗りこもうとやっていると、ロボロンテの手下たちはいつものことながら、一瞬

絶世の美女がきたかと思って鼻の下をのばした。それからいつもの伯爵の女装だということに気がつくのと、決まりの悪そうな顔をして遠慮がちに目を背けた。少佐はうやうやしく伯爵さまをクルーザーの中へ引き入れて、それから自分でエンジンをかけて、島を離れていった。

「きみは帰りには酔っぱらい運転になるよ！」

伯爵さまは云った。

「わたしが保証してあげる！」

伯爵さまはけたけた笑った。

「なんとでも云うがいいさ。いざとなったら、おれを捕まえに來た警官か役人かなんか、こいつでしめあげりゃいい。そのあとで、ひとりずつアドリア海のと真ん中へ投げこむんだ。ざまあみやがれ」

少佐は床下収納のドアを開けて、物騒な銃だの縄だの照明弾だのいうのをずらつと船内に並べた。伯爵さまは手をたたいてよろこんだ。

「すてき！ あなたって男らしいのねえ」

そうしてうつとりした顔で、この勇敢で物騒な操

縦士を見つめた。

エーベルバッハ少佐はかような美女を連れて、レストランやホテルや劇場のような、欧州の社会通念が男女ペアを推奨する場所へ乗りこんでゆくとき、ひそかな満足を禁じ得なかった。女装姿の伯爵を見ると、レストランではたいいてい、通りからもっともよく見える席へふたりを案内しようとしてたいへんなものだった。美しい、金持ちそうな伯爵は店にとって、まさにおのれの店のステータスの証明になるからである。そうしてふたりはもつともゆきとどいたサービスを受けるのだ。いったいこういったとき人間に否応なしに生じる、見苦しい優越の感情から逃れられる幸運な御仁があるか？ そんな人間は、いたところでたいしたやつではないだろうと少佐は思った。

美女はレストランのテラス席の一角で、夜の帳の降りてきたアドリア海を背景に、アドリア海の真珠よりもなお美しくたたずんでいた。ふたりをへだて

るテーブルには光沢のある純白のクロスがかけられ、赤いバラと色ガラスの容器に入ったろうそくが飾られ、シャンパンの泡が光る細長いグラスがあった。バラとろうそくの隣には、木でできたぼてつとした柄とりボンのついた呼び鈴があった。これは揺らすとリンという涼しい音がした。この音を聞きつけるや否や、矢のように給仕が飛んでくるのだ。もっとも、ひとびとはこの鈴をあまり揺らさないで、もっぱら目配せで給仕を呼んだ。給仕のほうでもそれが可能なように気をつけていたからである。

伯爵はたぶんこんな、いわゆるロマンティックな食事の場面など飽きるほど経験してきているに違いないのだが、それでも満足そうであった。そして少佐はそれで満足であった。

「やっぱり使用人つてものは、こういうふうに呼び鈴で呼ぶんでなくちゃ話にならないと思わなくて？」

伯爵さまはいまは女性らしい話し方をした。少佐は伯爵が見つめる先を、つまりバラの一輪挿しとろ

うそくの隣に置かれた呼び鈴を見やった。少佐は同意を示し、鳴らないように気をつけながら呼び鈴を手にとった。

「あんな黒い機械で呼び出されるなんて、コンラートがかわいそうだわ」

「あいつはそのことで、たぶん少なからず威厳を傷つけられたろうからな。あいつはもう寝とるんだろうか？ 八時を過ぎたが」

少佐は腕時計を見て云った。

「寝ているかもしれないわ。そして明日の朝ははりきって四時前から起き出して、仕事にかかるかもしれないわ」

前菜が運ばれ、グラスにクロアチア産白ワインが満たされた。タコやムール貝がどっさりついたサラダで、これはその昔任務で赴いた海つべりの街で、魚介食いで名を馳せた少佐を喜ばした。彼は牡蠣をいちどきに四ダースたいらげることもできた。そして実に気前よく代金を払ったので、地元のひとびとに熱狂を持って迎えられたのだった。

少佐はよりによってクリスマスの時期に執事を故郷の田舎村まで追っかけていった話をした。執事のためにあの一枚の絵を買ってからというもの、少佐の中でその思い出がしきりに渦巻いて、外へ出たがっていた。クリスマスを前にして、執事がたった一日の休暇を願い出たことからはじまる、なかなか愉快な冒険譚は、この期に及んで少佐の胸ひとつにたたんでおくには、あまりにもうるわしすぎた。少佐はなつかしく思い出しながら、変装して駅から執事を尾行した話や、執事の実家へ行こうとタクシーに乗ったら隣の村で降ろされたとか、村の少年クラウスがなかなか機転のきくやつだったとか、村の聖人ヤークコ神父と四人の少年たちが守り通した秘密のことを、誰にも話さないという誓文まで読んだのにもかかわらず、話した。これはゆゆしきことだった。秘密の神聖さと重大さを最大限尊重しなければならぬ職業に就いているエーベルバツハ少佐にとっては、かなりの問題行為だった。けれども少佐はこれが問題にあたるとは思わなかった。少佐の目の



前で、優しく微笑しながら話を聞いている伯爵は、少佐と執事のヒンケルの中へ割りこんでくることのできる、おそらく最初で最後のひとだった。

少佐は話を終えてから、昨日の服にはじまり今日のあまたの買い物まで、伯爵が執事に示した桁違いの気遣いについて改めて礼を云った。

「どうして？ 当然のことじゃない」

と伯爵は微笑した。

「父はいつでもわたしに優しくかったけど、唯一厳しく云ってきかせたことはなんだったと思う？」

伯爵は茶目つ気たつぷりに首をかしげた。少佐はなんだと問い返した。

「自分の配下にある者を人間らしくいたわること。

わたしはきつと、そういう連中に途方もない迷惑をかけるのだから、ねぎらうことを忘れないようにして」

少佐は考え、それからゆっくりと微笑した。

食事が終わりに近づいて、あとはデザートだけに

なった。給仕がろうそくのたくさんつつ立った、大きなハート型のフルーツケーキを運んできた。宝石のように色とりどりのフルーツと生クリームの乗ったケーキの上に、誕生日おめでとうのプレートが乗っていた。伯爵は目を白黒させた。彼はなんにも知らなかったのだ！ 当然だ。これはエーベルバッハ少佐が独自にしたことなのだから。少佐は隙を見て、レストランへ電話をかけていたのだった。そうして、誕生日のお祝いをなにかしてくれるように、密かに頼んでおいたのだ。また別の給仕が赤いリボンのついた大きな花束を持ってきて、伯爵へうやうやしく手渡した。あたりの席のひとたちはにやにやしながら、あるいはごく表面的な周囲との同調の表情を浮かべながら、これを見、美しい令嬢が古典的な手法でもってろうそくを吹き消すと、いつせいに拍手をした。

この使い古された手にも、伯爵は何べんもあっているに違いなかったけれども、それでもやはり彼は素直に感動して、しばらくはものも云えないでいた。

それから少佐をじつと見つめ、一度目を伏せて、もう一度見た。少佐は眉をつり上げた。彼は別にお祝いのスピーチをするのも、プレゼントを仰々しく手渡すのでもなくて、ただ椅子の背もたれに片腕を置いて、満足そうに、からかうように、伯爵を見ていた。彼らが男女ペアになってレストランへ乗りこんできた瞬間から、彼らが一種の演技を貫き通していたことは間違いなかった。この誕生日のサプライズというやつにも、やはりなにがなしわざとらしい、あまり少佐らしくない演技性というものがあつた。伯爵は少佐が自分をこのような典型的な状況の中へ押しこめてからかい、けれどもそのからかいに乗じて少なからぬ誠意を見せているのを感じた。伯爵は礼を云った。少佐は唇の端をつりあげて返してよこした。それでいいのだった。

伯爵は育ちのいい女性がなにかしてもらうとそうするように、周囲へ純粋な感謝と愛想を振りまいた。それからケーキを切りわけてもらい、満足そうに食べた。ケーキは大きかったので、残りは持ち帰るこ

とにした。それから長いことうつとりと少佐と話こんで、席を立つころにはすでに日付が変わるところだった。

少佐は酔っぱらい運転で島へ帰った。警官だの海上警備隊だのは出てこなかったもので、ふたりとも少しがっかりした。少佐はお役人を海へ投げこむかわりに、銃だの縄だのを次々に海へ投げこんだ。伯爵さまは履いていた美しいお靴を海へ放り投げた。そうしてけたけた笑った。

伯爵さまはお靴がないので、当然ながら上陸しても歩けなかった。執事のシンケルを呼んでスリッパを持ってきてもらうわけにもいかなかった。伯爵さまはそこで、少佐と向かい合って少佐の両足の上に自分の両足を乗つけた。そうして少佐に歩いてもらった。少佐はたいへんな苦勞をして、両足にふたりぶんの体重を受け、一步一步巨人かなにかみたいにのしのし歩いた。

ホテルのロビーやバーには何人かのお友だちがいて、変な格好で歩いてくるふたりを見て、思わず笑

ったり吹き出したりした。伯爵は少佐へとりすがつてのべつ頼ざりしたり、立て続けに頬にキスしたりしていた。自分を見るお友だちの視線を感じると、伯爵は盛大に手を振って、ひょいと少佐から飛び降り、素足でケーキの箱を振り回して彼らのもとへやってきた。そうして、箱ごとお友だちへあげてしまうと、両手を盛大に広げて投げキスをし、大きな声でおやすみを云って、エレベーターホールへ引き返していった。それでまた少佐にとりすがり、ついには少佐に尻を抱えられて、やってきたエレベーターに引きずりこまれていなくなった。

「なんでも若いうちさ。ふざけるのも、よろこびも悲しみも！」

お友だちのひとりがそう云って、読んでいた新聞へ視線を戻した。

「愛でさえもかい？」

別のお友だちがからかうように云った。

「……いや、そいつは年齢に関係なかったな」

新聞を読みはじめていたお友だちは顔を上げ、し

ばらく考えてから云った。

「なあに、なにさ？」

伯爵は風呂へ入りすっかり身ぎれいになって、ガウン姿でベッドへ横になっていたが、同じく風呂から出てきた少佐がぐいぐい起こすので起きあがった。酔いはもうさめていた。でもまだなにかうつりした気分の残滓は彼の中に残っていた。伯爵は少佐へよっかかった。少佐は紙袋を手にはしていた。眉を上げ、咳払いをひとつし、少佐は腕時計を確認して、正しくとうの昔に日付が更新され、ただいまは二十八日であることを確認した。そうしてこれは誕生日のプレゼントである、と伯爵さまへうやうやしく紙袋の中身を取り出してよこした。伯爵は目を輝かした。

紫紺の布張りに金細工のふちどりと脚がつけてある宝石箱が出てきた。布も金細工もだいぶくたびれていた。相当に古いものであるのは間違いない。いつだかおまえに云った気がするが、うちのシャ

ルロッテばあさんの仰々しい真珠の話」

伯爵は覚えていた。

「聞いたよ。耳がちぎれそうな大きな真珠の耳飾りだろう？」

少佐は微笑した。

「それだ。正確に云うと、そいつは耳と首の飾りのセツトで、代々ばあさんの家に伝わる逸品だった。ばあさんは、死ぬ前に遺言で、こいつをおれの母親に残した。なぜそうしたのかは知らん。自分の娘がいなかったからかもしれないし、だからといって親戚にもやりたくない理由でもあったのか、それとも単に嫁を氣に入っていたのか……シャルロッテばあさんが死んだとき、おれの母親の腹の中には正しくおれがいて」

少佐は複雑な顔をした。

「まだ男か女かもはっきりしなかった。ばあさんはこいつが女である可能性に賭けたのかもしれないし、男だとしても、嫁がさらに女兒を生んでくれる可能性に賭けていたのかもしれない。わからんが、とにかく

くこいつはばあさんから母親の手にわたって、その後はおやじの所有になった。ということは、おやじが再婚せんのだから、これはいずれおれの所有になるわけだ。實際あのくそおやじはおれが嫁をもらう夢をいまもって見ていて」

少佐は肩をすくめた。

「その嫁に一族伝来の宝石類のいっさいを与えようと思つとるらしい。そいつはおやじの勝手だが、おれにはおれの勝手がある。長話は以上だ。とりあえず、こいつを持つといてくれ」

少佐は宝石箱を開けた。箱の中には、実にみごとに大きな涙型の真珠の耳飾りと、二連になった真珠にエメラルドとこれまた大粒の真珠とがあしらわれた首飾りがおさまっていた。伯爵さまは息をのんだ。こういう逸品は、もう古い家の金庫からしか出てきやうがない。年代を経て深みを増した真珠、腕の確かな職人が手作業で作り上げた台座や金細工、現在採れるものとは輝きの違うエメラルド。

伯爵さまはなにか恐れ多い気がした。彼はふつう

どんな宝石の前にもひるまなかった。どんなに華美で豪華なものであっても、必ずやそれを手なずけ自分の前に屈服させてしまう自分の力というものを、伯爵は素直に信じて疑っていなかった。けれどもこれは、この真珠は、彼がこれまで数々捧げられたアクセサリーとはわけが違う。これは身につける人間を選ぶものだ。正規の審判と手続きとを経て、正式な資格を身につけた者だけが身につけることを許されるたぐいのものだ。伯爵はそれを知っていた。彼もまた自分のそういうものを持ちそれを身につけてきた人間だったからだ。今日レストランで身につけていた真珠のように……あれは軽い気持ちで、アドリア海の真珠へ敬意を表して一族の宝石箱の中から持ち出してきたのだったが……だがそういう軽い気持ちで扱えるのは、伯爵がグローリア家の人間であって、正式にその資格を有しているからだ。一族の宝石箱は、彼の前には頭を垂れ、静かにふたを開いて中を蹂躪されるままにまかせた。血という資格を持つ者の前には、一族の肌を彩ってきたこれら

の宝飾品は非常に従順だ。けれども、そうでない者の前には、命取りにすらなり得る。こうした宝飾品は自分の意志を持っていて、身につける者を調査し見極め可否の判決を下すのだ。おそろしいほど正確に。

伯爵は自分がかうろたえているのがわかった。彼はこういう問題について、周囲に思われているよりもずっと保守的な人間だった。彼は商品であるものとそうでないものとの区別を知っていた。無慈悲に横流しにしているものと同じでないものの違いを知っていた。来歴を調べるまでもなく、見た瞬間にそれはわかる。一家の、一族の歴史を吸いこんでいたものは重い。ときに五百年を超える果てしない年月の中で、さまざまな所有者の肌の上へ乗せられ、世のひとたちの嫉妬と賛美とを受け、うらやまれ、欲せられてきたものたちには独特の重みと意思のよなものとがある。伯爵は自分のために作られた宝飾品ならば喜んで受けた。けれども、このオーマ・シャルロッテの真珠の首飾りと耳飾りのように、所

有するに際し資格を有するようなものは……しかも  
エーベルバッハ家の所有物とあつては、その厳しい  
判定に合格しその重みに耐える自信は、伯爵にはな  
かった。

伯爵は困ったように少佐を見、やや身を引いて、  
それから決然と首を振った。

「悪いけれど、これは……これは、わたしには一生  
縁がないか、少なくとも、わたしたちにはまだ早ず  
ぎるように思うよ、クラウス」

少佐は眉の片側をつり上げた。意外な答えだった  
のはあきらかだった。伯爵はやや硬直した少佐を安  
心させるように早口で続けた。

「誤解しないでほしいんだけど、いやだと云うんじ  
やないんだ、きみの気持ちとはともうれしいよ、た  
だ……」

伯爵はどういったらいいものかしばらく考えた。  
そうして率直に云うほうを選んだ。

「こういうものは、いくらわたしだって、はいはい  
と云っておいそれと受け取れないよ。これを受け取

ることが、なにを意味するのかきみならわかるだろ  
う？ これは単なるアクセサリーじゃない。一族の  
象徴なんだ。その家の歴史の重みそのものだ。こう  
いう考えは、もしかすると古いかもしれないよ。  
だけど、わたしはそういうふうに考えるわけにいか  
ない。わたしもそういうものを背負った人間のひと  
りだからさ」

伯爵はおそろおそろ少佐を見つめた。少佐はおな  
かでも痛いような難しい顔をしていた。

「……わからん」

少佐はつとめて押し殺したような声で云った。

「おれにはほかに、こいつの譲り渡し先が思い浮か  
ばないが」

「譲り渡し先つて……だってこれはまだきみのもの  
になつてないんだろう？ いまはきみのお父さんの  
ものなんじゃないの？ だったら、いまこんなところ  
できみが好きにするべきじゃないよ」

「じゃあおやじが死んだあとならいいのかね？」

「そういう問題でもないんだけど……」

「じゃどういふ問題なんだ」

少佐はいらいらしてきたように頭をかきむしつて云った。

「どういふ状況になると、おまえはいはい云うのかね」

「どういふ状況になつたつて、云えないよ、はいはいなんて」

伯爵もまたいらしたように返した。

「なんでだ？ わからん。確かに時代がかつて大仰で古くさい品物だが、少なくともおまえがわんさか持つてるやつに引けを取るとは思わん。おやじだつて、いまさらこれを誰かにやるようなあてもないだろうし、黙つて金庫に眠らせておくよりはましだろうと思うんだが」

「だから……もう！ じゃあ聞くけど、これ、きみのおばあさんのものだったんだろう？ きみのおばあさんがきみのお母さんに残したわけだろう？ で、いまはお父さんが所有者なわけだろう？ そこへわたしが乱入していいの？ きみなにか変な感じがし

ない？」

「特にしない」

少佐はきつぱりと云った。伯爵さまは頭を抱えた。

「ああ、もう、きみは！ どうしたらきみに通じることかなあ、この朴念仁！」

「なんとでも云え。おまえの云いぶんが、おれにはわからん。おれがこれをおまえにやつたからつてなんだ？ おれが嫁に來いと云うとでも思つてるのか？ いったいうちの人間じゃなきゃ、これを身につけてはいかんといいきまりがあるのかね？」

「あるのと同じさ。きみはわからないんだ、きみはこういうものをつけたことがないからね！ こういうものが、どんなに厳しく持ち主を選ぶか、きみにはわからないんだよ。これがなにを象徴しているのか、きみにはわからないのさ。他人の受けた勲章をつけていろと云われるようなもんだよ。決まりが悪いったらありやしない！」

少佐はしかめっ面をして考えこんでしまった。勲章のたとえが効いたらしかった。確かにそいつは決

まりが悪い！　しかし……………

少佐が黙りこんだので、ふたりとも黙ってしまつた。いったいなんだつて、よりによつて誕生日の当日にこんな雰囲気の中にいなければいけないのか？　たまりかねて先に口を開いたのは伯爵だつた。

「きみに悪いことをしているのはわかっているよ。きみの気持ちを無碍に扱うつもりはないんだけど……」

……

少佐はなおしばらく黙っていた。

「……やっぱりわからん。わかる気がしない」

少佐はふいにそう云つた。

「おやじのものはどうせいつかはおれのものだ。それをいま好きにしてなにが悪い。どうせおやじは気がつかん。おれと同じで、こういうものへはなんの興味もない男だ。おれは別にこれをやったからつておまえになにも要求しない。いまおれにわかっとなるのは、エーベルバッハ家は現行ほぼ確実におれの代で終わるだろうということだ。おまえのそこだつて同じだろう。ひとり息子どうしの悲しい宿命だ。も

しかするとうちは、そのあと親戚の誰かが跡を継ぐのかもしれないがね。いとこの中に、適当なのがいるかもしれない。そうなつたら、こういうきらきらしたやつはみんなそいつのものになるんだ。正式にはたぶん、その奥方のものにだ。なぜだ？　なんだつておれから、おれの手を離れたとたんにそんなやつものにならなきゃならんのだ。こいつはおれのものだ。あの家と、あの家のものはおれのものだ。おれのものはおれの好きにする。ごたごた云うやつは許さん」

少佐は別に、なにか熱をこめて語つたのではなかつた。彼は淡々と云つたのだつた。でも伯爵はその淡々としたことばの裏にあるなにかに気圧されて、押し黙っていた。

「この耳飾りと首飾りは確かにばあさんのものだつた。ばあさんに似合つとつた。ばあさんには妹がいて、もしかするとその妹のものになつたかもしれない、ふたりとも同じように資格があつたはずだが、これはばあさんのものになつた。ばあさんのほうが



似合うと、たぶんばあさんの母親が思ったんだろうさ。で、ばあさんのものになったのでこいつはうちに来た。ばあさんは今度はこれをおれの母親へ残した。自分の親戚でなしに。自分の妹でもなしにだ。

たぶん、似合ったろうよ、母親には。で、いまここにあるこいつを、おれはおまえに似合うと思うからやろうとするんだが、いったいこれが、前例となにか矛盾するのかね？ わからんな。ばあさんと母親は血がつながってたわけじゃない。義理の親子ではあったがね。ばあさんが、自分の実家からこいつを持ち出してきたときに、こいつはもう住み慣れた我が家を離れたんだ。家を離れたら、新しい家に落ちて着くか、さすらかのどつちかしかない。どっちにしたって、こいつはいつも自分に具合のいい持ち主を選んできたんだろうよ。おれはそう思う。で、今度はおれをそそのかして、いい加減金庫に眠ってないで表舞台に出て来ようとしとるんだと、おれは思う。おれなんざ、こういうものにかかるといいように使われるんだ。朴念仁だからな。なにしろ」

少佐はそう云って、にやりと伯爵へ笑ってよした。伯爵はもうなにも云わなかった。ただ少しうるんだ目で少佐を見つめていた。伯爵もまた、自分がきつといいように使われているのだと思った。その考えは非常に気楽で、背負うものがなにもなくて、たいへんに具合がよかった。

少佐は改めて伯爵の目の前へ小箱をさしだした。そうしてそれを開いて、まずは耳へぶら下げるほうを取り出し、ややおずおずした微笑を浮かべる伯爵の耳へぶら下げた。真珠は彼の耳の下に、えもいわれぬ景色を見せておさまった。伯爵じしんがそのなじみ方へ驚くほどだった。それから少佐は首へぶら下げるほうを取り出して、伯爵の長い首へ腕を回してぶら下げた。冷たくしっとりとした真珠とエメラルドの粒が、伯爵の鎖骨の上で歓喜するように光り輝いた。

少佐は伯爵を引いて浴室の大きな鏡の前へ彼を連れていった。鏡に映る自分へ伯爵は見とれた。金の巻き毛と肌と長い首の上に、真珠はよくなじんで具

合よくおさまっていた。大粒の耳飾りは、普通の人間なら負けてしまふかしれなかつたが、伯爵の前にはこれは本来の引き立て役に戻つて、懸命に彼を盛り立てているようだった。いまの時代には大仰に過ぎるかもしれない首飾りも、ちつともいやみな感じを与えないで、数十年來のつきあひをしてきたようにびつたりとおさまっていた。

伯爵はこれらの宝石とそれをつけている自分へ見とれて、うつとりとほえみ、それから鏡へ近寄つて、自分の耳や首を突き動かされるようにまさぐり、髪を持ち上げたり下ろしたりして、具合を確かめた。少佐は彼が自分の美しさへ非常な満足を覚えていることを、そしてそれが必然的にいつも彼にもたらず熱に浮かされたような気分のことを感じ取つた。とつくりと満足して少佐を振り返つたときの彼はもう、ぞつとするような高慢な、満足げな微笑をたたえていた。なにかを征服し終えた者の顔だった。

「おれの目に狂いはなかつたろう」

少佐は満足して云つた。

「無駄な抵抗をしやがつて。おまえがこういう光りものから、逃れられるわけがないんだ」

少佐は鏡の前の伯爵へ近づいていつて、後ろから抱きすくめた。伯爵の身体が待ちわびていたように震えた。

「きみが正しかったよ、クラウス」

伯爵さまの声はもうなにか、浮ついて我を忘れたような感じを帯びていた。

「きみの勝ちだ。わたしは自分がそっくり丸ごと、きみにとらわれてしまつた気分だ……きみは危険だよ、いざとなればわたしを幽閉しておくことだってできるだろうねえ……ああ……」

伯爵のおしやべりはそこで途切れた。少佐がしやべり続けるのを許さなかつたからである。

次の日はまる一日、みんなしてホテルのレストランで伯爵のためのパーティーに明け暮れた。みんな例年と寸分違わず陽気にやつた。伯爵はしかし、どちらかというところではなかつた。彼は昨夜か

ら自分のものになった耳飾りと首飾りとをぶら下げ、王のように座していた。彼は当然のように横へ少佐を従えていた。少佐は従僕のようにまめまめしく伯爵の要求を聞いて、グラスを持ってきたり料理を運んだりした。伯爵は高慢な顔で少佐を顎で使うのだった。少佐はまるでコンサート・シンケルみたいだった。一夜にして、すっかり従僕になつてしまったようだった。そしてふたりはこれを楽しんでいた。なんといつても誕生日の一日は、伯爵は世界の王であるべきだからである。

お友だちは口々に伯爵にぶら下がったアクセサリをほめた。どこで手に入れたのかおそれながら訊いてくるお友だちに対しては、伯爵は意味深な微笑を向けるにとどめ、それからまたさらに意味ありげに少佐を見るのだった。

どんちゃん騒ぎは一日中続き、夜になつてもまだ続いた。今年も実にいろんなものが伯爵へ送られた。伯爵はまたしこたまもの持ちになった。そして税金対策と所得隠しに明け暮れるジェイムズくんの苦労

が増えるのだ！　しかしそんなことは、伯爵の知ったことでなかった。

エーベルバツハ少佐は浮かれ騒ぐ男どもを見ながら、ひとりでほくそ笑んでいた。彼はときおり伯爵の首や耳で揺れる真珠を眺めて、また満足した。どう控えめに見積もつても、これらは抜群に伯爵に似合っていた。少佐は満足だった。こんな誕生日パーティーのどんちゃん騒ぎなど、なにものでもなかった。ここにいる全員が団結して総攻撃をしかけてきたとしても、エーベルバツハ少佐にはかなうまいと少佐は考えた。彼は実に、満足だった。

コンサート・シンケルはせわしく給仕をしながらも、伯爵さまへぶら下がったアクセサリを見て、なにが起きたかをすぐに悟った。シンケルはそれらに見覚えがあり過ぎるほどあった。彼は大奥さまへそれがうやうやしくつけられるのを見たこともあった。

あれは大奥さまの最晩年の日のことだった。かなり前から、大奥さまは神経の痛みのためにもう起きあがることもできなくなって、床にふせっていた。それがあの日、なにかの行事へ出席するために、大奥さまは従僕の手によって担がれて車椅子に乗せられた。非常に長い時間をかけてお召し替えがなされ、そうして最後に、もういない侍女コンスタンツェのかわりに身の回りの世話をしていた女中によって、うやうやしくあの耳飾りと首飾りがつけられた。その瞬間、大奥さまはぐつと背筋を反り返らせ、胸を張り、従僕ふたりを呼んで両腕を支えさせると、渾身の力でもって車椅子から立ち上がったのだ。あの瞬間を、執事は一生忘れないに違いない。日々全身の痛みと疼きに耐えていた大奥さまが示した、あれは最後の女主人としての威厳だった。彼女はその瞬間に、自分が背負いこんできたものの重さを、その権威と責任と義務との重さを、身をもって示したのだった。執事は……当時は執事見習いにすぎなかったが……あの日、あの瞬間、弱りきって息をするに

もひと苦勞だった大奥さまが、まるで別人のように誇らしげに立ち上がったあの瞬間、この家へ生涯忠節を尽くし、決して背くまいと心に決めたのだった。それはあまりにも偉大な犠牲だった。あまりにも高い精神だった。その三日後に、大奥さまは息を引き取った。

ヒンケルは葬儀が終わり、すべてのことが片づいてから、ひとり隠れて声を上げて泣いた。涙がとめどなくあふれた。あの耳飾りと首飾りが、それが象徴するものが、大奥さまのほとんどなくなりかけていた体力を、根こそぎうばったのだった。それでも、彼女はそれを誇りに思っていた。自分が何者でありどんなものを背負っていたのかを、彼女はよく知っていたのだ。

それからしばらくして、新しく女主人の座におさまった奥さまは、大奥さまから譲られたその耳飾りと首飾りを自分へぶら下げてみようとして、やめたことがあった。

「これはまだ、わたしには重すぎると思うわ、ヒン

ケル」

彼女は真珠を持つ指先をかすかにふるわせながら云った。

「これはまだ、わたしにふさわしくないわ。お義母さまのお気持ちには、よくわかる気がするの。これにふさわしい人間になれと云ってくださっているのよ。だけど、まだだわ。これはまだわたしが身につけてはいけないものだわ……わたし、いつかこれを堂々とつけて、お義母さまのようになれるようにやってみるつもりだわ。いつか、そんな日が来るかしら……」

その日は来なかった。しかし、いま……そのとき彼女のおなかの中で日々育っていた赤ん坊が、少年になり、青年になり、それから……執事は思わず持ち場を離れて、ひとりホテルを出た。彼の脚はわれ知らず浜辺へ向かっていた。目の前に、アドリア海がなにも知らぬげに揺れていた。今日も海は青緑に輝き、穏やかだった。大奥さまの目は、ちょうどこんなふう、すばらしく深い青緑をしていた。執事

は泣いた。もう声を上げる歳ではなかった。この何十年のあいだに、彼はもうそんな方法を忘れてしまっていた。彼はただ、涙が頬を伝うのに任せた。

「おまえが泣こうがわめこうが、おまえがここで働く決めたからには、一人前になってしっかり働いてもらわねば困りますよ」

シャルロット大奥さまは厳しいひとであつた。使用人は誰でも一度と云わず何度も何度も泣かされた。しかしまた、大奥さまは使用人に並ならぬ気遣いを示しもした。褒美を惜しみなく与え、人間としてのやむを得ない事情にはなにかと都合をつけ、かばい、守った。使用人をひとり雇い入れるときには、その一族郎党をすべて面倒見るつもりで、彼女はいたのだった。それが義務だと、思っていたのだった。

大奥さま、シャルロット大奥さま……執事は頬をぬらし、彼女の目のような海へ、おのれの感情を投げ出した。彼は何十年もの歳月を忘れて、あの日、あの最後の輝きを放った大奥さまへ、声の限りに叫んでいた。ヒンケルはお宅へ雇い入れていただき、

幸せでございました、これ以上に幸福な使用人はお  
りすまい、あなたさまの残したあの真珠の耳飾り  
と首飾りとは、いま、また次の方へ引き継がれまし  
た。あの若造だったヒンケルも歳をとりましてござ  
います。あなたさまの期待通りの使用人になれまし  
たかどうか……きつと遠からず、わたくしも大奥さ  
まのおそばへ参りますでしょう、そのときには……  
……

海は穏やかに揺れ動いていた。